

0 4—R 010

ハイパーネットワーキング社会 の構築と展望に関する研究

平成5年3月



財団法人 日本情報処理開発協会

この報告書は、日本自転車振興会から競輪収入の一部である機械工業振興資金の補助を受けて平成4年度に実施した「ハイパーネットワーク社会の構築と展望に関する研究」の成果をとりまとめたものであります。

はじめに

この調査報告書は、財団法人日本情報処理開発協会が、システムズ・アナリスト・ソサエティに調査依頼した「ハイパーネットワーキング社会の構築と展望に関する研究」の成果をとりまとめたものである。

“ハイパーネットワーキング社会”という言葉に込めたものは、情報機器類の発達によって、生活者一人一人が豊かでゆとりをもった創造性が十分に発揮できる環境を手に入れることができるという社会のイメージである。情報社会というものが私たち一人一人をがんじがらめにし、個性を発揮できないような環境になってしまってはならない、という問題意識から発している。

今回の報告書の内容は、昨年の第1期の研究を引き継ぐような形でつくられている。システムズ・アナリスト・ソサエティのメンバーは様々な業種の会社のサラリーマンであることが多いが、今回は彼らに対してのアンケート調査を行った。情報に対しての接し方や、今後情報機器類が身のまわりに増えてくるにあたってどのように対処しようとしているのか、といった事柄をアンケートしたわけであるが、その結果が第1章と第3章を中心に記述してある。

第2章は、システムズ・アナリスト・ソサエティのメンバーの幾人かに、より詳細な踏み込んだ形のヒヤリング調査（デプスインタビュー調査）を行い、その結果をもとに、私たちの意識がどのように変わろうとしているのかに言及したものである。とくに働くということに関しての意識の変容や家族との接し方、日々の生活に関しての意識がどう変わろうとしているのかを生々しい証言をもととして読み取ろうとした。

第4章は、それらのアンケート結果を踏まえてのまとめの章としたが、「心社会と情報社会の交流」など7つの項目に整理する形で、“ハイパーネットワーキング社会”構築に向けての課題を提起した。第4章を通じてのテーマとしては「情報社会に日本は生き延びていけるか」というものとした。

未だ議論が生硬でこなれていない部分が多いとは思われるが、一つの問題提起の形には成り得たのではないかと考えている。

本年度の研究成果を踏まえ、来年度はさらに具体的なイメージの構築に向けて検討を進め、より内容の濃いものとしていく所存である。

ここに、ご協力を頂いた方々および関係各位ならびに快くアンケートやインタビューに応じて頂いた方々に深く感謝するとともに、あわせて本研究の成果が、新たな局面での情報処理技術の発展に役立ち得れば誠に幸いに存ずる次第である。

平成5年3月

目 次

第1章	サラリーマン達の情報との接し方の現状.....	1
1.	人材の情報—名刺をどう管理しているか.....	3
2.	新聞や雑誌、テレビ等のメディア情報.....	6
3.	手帳の活用.....	10
第2章	実例を通したサラリーマンのライフスタイルの変化.....	15
1.	自立を求めるサラリーマンとライフスタイル.....	17
2.	自立を求めるサラリーマンの実例.....	23
第3章	“ハイパーネットワーキング社会”へ至るための問題点 の整理.....	57
1.	サラリーマン達の仕事感.....	59
2.	地域や家庭での人間関係に関する意識.....	65
3.	新しいネットワークに関しての意識.....	73
4.	サラリーマン達の描く退職後のイメージ.....	77
第4章	“ハイパーネットワーキング社会”への展望.....	85
まとめ	：情報社会に日本は生き延びていけるか.....	87
1.	心社会と情報社会の交流の必要性.....	88
2.	シーズとニーズのギャップの問題.....	89
3.	情報システムデザインにおけるブレークスルー思考の必要性.....	90
4.	環境破壊型無価値情報氾濫の問題.....	94
5.	情報創造経営の必要性.....	99
6.	文化的距離と言語の壁克服の必要性.....	108
7.	情報流の物理的距離克服の必要性.....	109

第 1 章 サラリーマン達の情 報との接し方の現状

家庭、職場を問わずいろいろな情報に人は取り囲まれている。家庭、職場において人は数々の情報を毎日、整理し活用している。特に、職場では情報を収集し、整理し、判断して、発信する、蓄積するなどの一連の作業が、仕事として行われているといってもいいであろう。労働の内容そのものが、こうした情報処理のプロセスである。産業別就業人口が第1次産業から第2次、そして第3次産業へと移っていくなかで、モノづくりに直接携わる人々よりも、企業内外の情報を処理する人々が増えてきたことも背景にあらう。

こうした点を踏まえて、ここでは職場における個人に視点をあてて、情報とのかかわりをみていくこととする。今回は、SASの会員を対象に昨年10月に実施したアンケート調査結果をもとに、サラリーマンの具体的な情報管理についてみていくことにする。ちなみに、アンケート調査は、SAS東京の会員100人に郵送で調査票を送付した。回答は40人から得ている（回収率は40%）。なお、調査票では、設問ごとに自由に記入してもらう方法をとった。

1. 人材の情報—名刺をどう管理しているか

人材に関する情報管理は、仕事をする上でとりわけ重要なものであらう。その中でも名刺は人と会うたびに交換されるだけに、その管理は「必要な名刺を、必要な時に、すぐ取り出せる」管理を具体的にどう行うかがポイントと思われる。今回のアンケート調査では名刺について、今まで試行錯誤してきた事、現在困っている事や感じている事を聞いている。

(1) 使用している機器

今回のアンケート調査結果からみると、各回答者それぞれの整理の方法を行っており、機器についてもいろいろな機器を利用し、大まかな傾向が把握しにくいのが特徴となっている。具体的な機器は、名刺ホルダー、名刺ボックス、名刺箱・ケース、電子手帳、ワープロ、パソコンなどであり、従来からある機器から新しい機器まで幅広い回答となっている。

しかしながら、ワープロ、パソコンを利用しても、「使い勝手が悪い」、「手間だけかかって、今は使っていない」、「入力に手間がかかりすぎる」などの意見にみられるように、ワープロ、パソコンをうまく使いこなしているケースは少ないことが伺われる。「名刺のデータ・ベースは500枚以上にならないと、威力を発揮しない。生きた名刺のままでいい」が、回答者の実情のようである。

このため、案外、名刺ホルダー、名刺ボックス、名刺箱・ケースのようにいわばロー・テクの文房具を使っている回答者が多いのが目立っている。「現在コンタクトのある方達の名刺は、名刺ボックスで充分活用可能だし、大がかりなシステムは不要」、「名刺は関連団体毎に名刺箱に入れている」、「市販の名刺入れに順番に入れている」という回答などである。

(2) 分類の方法

「必要な名刺を、必要な時に、すぐ取り出せる」管理となると、何らかの分類が必要となる。今回のアンケート調査からみる限りでは、これも回答者がそれぞれの分類方法によって整理しているのが現状といえる。氏名の50音順、業種別、テーマ別、知り合いのジャンル別（ビジネス関係、知人・友人、同窓など）、よくコンタクトする・しない別などである。50音順だと名前や企業名を覚えていないとすぐひきだせないし、業種別では分類不明の業種の場合、これも処理が難しくなる。

(3) 情報の付加

また、名刺を受領して、会った日付、ミーティングの名称、人物の趣味、人物の寸評、重要度などを書き入れる回答者も多かった。数多い人と会い、名刺を交換すると、簡単に顔や印象を思い浮かべることは難しくなる。そこでこうした情報を、名刺交換のときに書き入れしている。また、その後また会ったときに、会った日付、会談の目的を記入し、個人情報のデータづくりをめざしている回答者もいた。

(4) 情報の更新

名刺に関する情報については、たえず更新しないと生きた情報として利用できないことはいうまでもない。名刺の人物が異動や転勤のために所属や連絡先が変わり、情報の更新が必要となる。また、ほとんど連絡をとらなくなった人もでてきたり、名刺が長年にわたりたまっていくためにときには廃棄する必要もでてくる。

こうした名刺情報の更新については、手間暇かかるためにあまりふれている回答者はいなかった。「過去に情報整理カードに転記し、名刺にそのままはりつける整理を行ったが人事異動の改訂に追いつかず挫折した」の声に代表されるように、更新については回答者が頭を悩ましているのが実情であろう。そうしたなかでなかには定期的に半年、1年たてば廃棄する人と残す人を分ける、時折チェックして不要な名刺は捨てる、などの意見もあった。しかし、これでも廃棄する人と残す人を分ける基準をどうしたらいいのか、という課題に悩まされているとの回答もあった。

(5) 名刺情報の活用

名刺の情報管理を整理し、蓄積し、更新しても、実際の利用となると案外利用していない場合が多いのも実情であろう。アンケート調査では、年賀状を出す出さないの判断に使っている、また頻繁に連絡する人を20~30人分まとめて持ち歩きたえずすぐ連絡できるように対応など、の意見が聞かれた。

いずれにしても、多くの名刺を蓄積して、活用できるようにしても、そこまでの情報のデータ・ベース化までの作業に時間を取られてしまって、情報を実際活用して仕事に生かすのはこれからの様子が伺われた。

(6) 名刺管理のまとめ

以上みてきたように、人材情報のひとつである名刺の管理については、各回答者がそれぞれ工夫してそれぞれの方法で行っているといえる。しかも、

機器の利用についても、ハイ・テクの機器よりかは、従来どおりのいわゆるロー・テクの機器が利用されている。名刺の数、入力の手間、活用の仕方などの点からみると、まだ試行錯誤の状況にあることが伺われる。そして、分類の方法、名刺を廃棄する際の基準など、どれをとっても各回答者が頭を悩ましており、これといった解決策がないのが現状であった。

今回のアンケート調査からみる限り、サラリーマンにとっては、共通の名刺の情報管理のやり方はみられず、回答者がそれぞれに自分の最もいいと思われる方法で今後とも管理していくしかないといえそうである。（表1）

2. 新聞や雑誌、テレビ等のメディア情報

本節では、日本のサラリーマン達がどのように新聞や雑誌等のメディアからの情報に接しているのかを、今回のアンケートからみしてみる。該当欄の回答39件（無回答1件を除く）を見ると、その苦労や工夫がよく現れている。

(1) 具体的方法

回答の中で、実際に利用している具体的な方法について記述されたものは、全て新聞や雑誌等の切り抜きとその代替方法について、といってよいものであった。切り抜きについての回答が16件、その代替方法についてが11件あった。後者の中には、切り抜きそのままではなく、メモにするなど、自分で加工するものが4件含まれていた。なかにはこまめに、「ワープロ等に要旨、キーワード等をまとめて、紙に出してファイルしている」との回答があった。

自分で加工するものの中で、自分で考えたことやアイデアについては、カードを利用しているとの回答が2件あった。カードは、いつでもどこでも使える手軽さがあり、時や場所を選ばないで浮かんでくるアイデアを記録するのにちょうどよいということであろうか。1件だけ紹介すると、「アイデアなどは名刺サイズカードで整理している。利点は車内でもどこでも記録ができ、1件1葉なので管理が容易」というような回答であった。

また、商用データベースを利用するなど、電子的な方法と言えるものが7

件あった。具体的に示すと、「以前は新聞・雑誌の切り抜きを保存していたが、電子メディア（パソコン通信、各種データベースのオンラインサービス）が発達して、馬鹿馬鹿しくなって一切やめた。」、「自分が発信するものはマックを活用している」というものがあった。具体的な方法というくり方ではないかもしれないが、「ファイルをしてあとで見ることはまずないので、必要なことは覚えてしまうことにしている」との回答が1件あった。

(2) 情報の入手・管理の問題点

情報の入手・管理の問題点を述べている回答が11件あった。そのほとんどと言ってよい10件が、「とっておいても利用していない」という類のものである。（この中には「整理できない」、「分類できない」という回答であったのだが、趣旨は「利用していない」ということと考えられる。）例えば、「メモ帳に書き込むようにしているが、必要な時に見つけ出せずに苦勞している」、「いろいろな情報をとりあえず収集するのだが、“お蔵入り”をしてしまい、活用していない」などである。ところで、「情報をとっておいても利用していない」というこの10件のうち、6件が切り抜きについての問題点としての回答であった。

また、他の問題点1件は、「電子媒体に入力しているが、その手間が大変である」というものであった。

(3) 情報利用と目的性

収集した情報が利用されているような印象を受ける回答は少なく、4件あるだけであった。そこには、利用目的があるという点が共通している。例えば、自分で何かを書くためや仕事の参考のために、テーマを決めて集めた情報は、活用されているようであった。この点から類推すると、情報の発信者となる人ほど情報の収集も上手なのではないかと思われる。具体的な回答は、「カード化しているが、かなり選択をする。エッセイなどを書く時や、講演の原稿、投稿などの時に役立てる」、「自分で物を書く時、必要の為に集め

た資料は大切にする。」というものがあつた。

(4) 情報を捨てること

今回のアンケートを見ていると、情報は“いかに捨てるか”も重要であることが見えてくる。収集した情報は放っておくと溜まる一方で整理がつかなくなる。将来どの様な情報が必要になるのかはわからないのだから、蓄える情報の量は多くなりがちである。電子的なツールを使用している例が少ないだけに、この問題は大きいと思われる。必要な情報を活用できる状態にするために、使わないと思われるものをいかに捨てるか、このことに触れた回答が5件あつた。この中で3件は、「定期的にチェックして不要と思われるものは捨てる」というものである。

情報を捨てることについての具体的な回答には、「切り抜き、メモ、パンフレット類はジャンル別に整理しファイル。ある程度たまってきた時点で整理し、パソコン、ワープロでレジュメを作成して、要点を整理する。同時に死に筋情報も片づける」というようなものがあつた。また最初から、「各種情報は読んだらすぐ捨てることにしている。必要な時にあらためて縮刷版やバックナンバーなどで探すことにしている。」という回答が1件あつた。ところで、本節の最初のところで紹介した、情報管理の手段について、「おぼえてしまう」ことにしているとした回答も、具体的な媒体を用いると整理がつかなくなることを暗に示していると考えられる。

(5) 電子的なツールによる情報の入手・管理についての一考察

現在の情報管理の問題点を見ていると、コピーの機械もなく、筆記具も墨と筆であつた時代の博識家たちは、どのように情報を整理していたのだろうかと思惟したくなる。道具はどんどん便利になり、情報の管理は非常にしやすくなっているはずである。情報の氾濫が言われ、情報の取捨選択の難しさが指摘されている現在、本当に必要なのは何だろうか。情報を保存する手段なのか、情報を運んでくれるメディアなのか、情報の本質を見抜くため

の人間の能力なのか、できるだけ多くの情報を記憶する能力なのか。それとも膨大なスクラップを作り保管するための人手と場所なのか。苦勞してまで情報を蓄積しておきたいと考える人がどれだけいるだろうか。「ゆとりの時代」とは、ある意味では願望であり、そのように生活がしたかったのではなかったろうか。今までは、いわゆる「知的生産」を仕事としている人は、いつも時間に追われるようにしているイメージがあった。常に情報を収集し、しかも自分のものとして発信していかなければならない。これらはどちらも時間を要する。このようなことは、もう変わってよいのではないだろうか。

今回のアンケートでは少数ながら回答のあった、電子的なツールによる情報の入手・管理が解決の方法にならないだろうか。以下ではこのことについて考えてみたい。

まず、なぜそのようなツールの利用者が少数派なのだろうか。

- ・コストが高い
- ・なんだか面倒臭い
- ・コンピュータ・アレルギー

もしこれらが理由ならば、パソコン、ファミコンでゲーム感覚で電子媒体に接して育った世代が成長すると、世は一気に電子ネットワーク社会へ転じていくかもしれない。彼らにとっては、このツールを使うこと自体が面白いのだから、状況は全く変わってくると考えてもよいだろう。

- ・ツールが使いにくい
- ・得られる情報が不完全である

これらが理由だとすると、これも時間とともに利用者と供給者の両方にノウハウが蓄積され、改善されていくだろう。紙の媒体に比べてみれば、まだ使いやすいものに進歩するためには時間が充分に経ったとは言えない。文字ができてから、ほとんどの人が読めるようになるまで、どれだけの時間を要しただろうか。多くの人がキーボードとディスプレイを前にして、扱い方が分からない人が途方に暮れるという現在の状況は、いつまでも続くわけではないだろう。情報処理は非常に汎用性のある“道具”であり、このような道

具はまずそれが先にあって、後から利用方法が考えられることが少なくない。今まではとにかく接する機会が少なかった。多くの人が早くから利用するようになれば、全く違った状況になるだろう。

電子媒体は費用はかかるが、自分で情報を蓄えないでも、外部のデータベースなどから入手できる利点がある。当然のことだが、新聞などの切り抜きは、自分で作るものである。だから、自分が気づいたことしかフォローできない。しかも必要と考える範囲に限られる。興味にまかせて作っていったら、それを保管するのにいくら場所があっても足りないし、どこに何があるのか分からなくなってしまう。しかし、我々が必要とする情報は、必ずしも普段から自分で気を付けているジャンルばかりではない。我々が新しい発想を得る時は、それは無から生じるものではなく、断片的であれ、何らかの“元”があって、そこから生まれてくるもので、この断片をどのように組み合わせるにかかっているところが大きい。だが、自分の専門以外のジャンルについての情報を、自分の力だけできちんとした形で入手できるだろうか。

情報は人が活用して初めて活きるもので、しまっておくだけでは何の価値もない。程度に差こそあれ、多くの人は情報を仕事などに活用したいと考えている。しかし、アンケートを見る限り、現在、既にあまりにも多くの情報が、特定の人や組織にしか利用されていないようである。このような情報がもっと広く利用されるようになれば、個人、ひいては企業など組織の活性化が進むだろう。今後は、個人レベルで外部データベースが活用できるような、教育も含めたインフラストラクチャの整備が望まれる。

3. 手帳の活用

手帳は、スケジュールの管理、あるいはメモ帳としてなど、仕事する上ではなくてはならないものである。手帳の活用は、「すぐ情報がとりだせて、わかりやすい」がポイントとなろう。今回のアンケート調査では手帳について、名刺同様に今まで試行錯誤してきた事、現在困っている事や感じている事を聞いている。

(1) 使用している機器

今回のアンケート調査結果によれば、各回答者それぞれのものを利用しているものの、回答者の多くは従来の手書きの手帳を使用している。具体的な手帳としては、タイムのシステム手帳、能率協会の手帳、シンクタンク発行の手帳、会社発行の手帳などがあげられている。

これに対して、なかには電子手帳を使用したいと考えている回答者もみられたものの、「電子化は絶対無理。使いやすい慣れた手帳を長期に使うのがコツ」、「一覧性がないから電子手帳はきらい。ふつうの手帳が一番便利」、「手書きの手帳が一番と信じている」などの意見が大勢を占め、実際の利用までには至っていないのが現状であった。「電子手帳は持ち運び、メンテなどで不便」、「それほど忙しくありませんので、電子手帳は不要です。電子手帳の入力の手間がかかりそうです」のコメントにあるように、電子手帳の使い勝手の悪さや入力の手間がかかる点を指摘する回答者が多かった。

(2) 手帳の活用方法

手帳の活用としては、スケジュール管理が大半で、住所録（アドレス）、備忘録（メモ）などの活用方法はあまりみられなかった。このため、手帳は主にスケジュールの管理に主に利用している状況といえる。ちなみに、スケジュール管理としては、具体的には1日単位、1週間単位、1か月単位など、回答者の使いやすさによって時間単位を選択していた。

また、「システム手帳はスケジュール管理が主だが、システム手帳になんでもメモしている」、「アドレスノートとメモノートは、手帳と別にしている」、「会社支給の手帳は関連会社の住所・電話が掲載されているので、住所録として不可欠」など、回答者が手帳によるスケジュール管理機能以外に住所録、備忘録などとしても一部工夫して使っている状況が伺われた。

表1 名刺管理の概況

項 目	アンケート調査結果のまとめ
使用している機器	・ 名刺ホルダー、名刺ボックス、名刺箱・ケース ・ 電子手帳、ワープロ、パソコン
分類方法	・ 氏名の50音順、業種別、テーマ別情報の付加 ・ 名刺に記入（会った日付、会合の名称、会った人物の趣味、人物の寸評、重要度） ・ その後会ったときの情報付加（会った日付、会談の目的）
情報の更新	・ 定期的に廃棄する名刺と廃棄しない名刺を分けて保存する
名刺情報の活用	・ 年賀状を出す、出さないの判断に使用している ・ よく連絡をとる人だけまとめて、持ち歩いて活用している
名刺管理の問題点	・ ワープロ、パソコンは使い勝手が悪い、入力に手間がかかる ・ 分類については、分類不明の場合の処理が難しい ・ 情報の更新は手間暇がかかる ・ 廃棄する名刺、残す名刺の基準づくりが難しい ・ 名刺情報を蓄積しても、うまく活用する方法がみつからない

(3) 手帳活用のまとめ

以上みてきたように、手帳の活用については、従来どおりの手帳を利用し、しかもスケジュール管理のための利用が主である点が特徴であった。このため、スケジュール管理の目的からすると、従来の手帳で充分であり、電子手帳の利用までには至っていないことが伺われる。また、今回のアンケート調査をみるかぎり、手帳に関しての不満や問題点はあまりみられず、「年が変わるたびに住所録などを取り替える手間が大変」の不満がみられただけであった。

手帳によるスケジュール管理については、現状から見る限り回答者は、手帳を使いこなし、それなりに管理に役立てているといえる。（表2）

表2 手帳の活用の概況

項 目	アンケート調査結果のまとめ
使用している機器	・ タイムのシステム手帳、能率協会の手帳、シンクタンク発行の、会社の手帳
手帳の活用方法	・ 電子手帳
手帳活用の問題点	・ スケジュール管理のために活用しているのが大半（1日単位、1週間単位、1か月単位など） ・ 住所録、備忘録としても一部活用している ・ 電子手帳は入力の手間がかかり不便である（使い慣れた従来の手帳が使いやすい） ・ 1年ごとの更新のときに住所録の取替えが不便である

第2章 実例を通したサラリーマンのライフスタイルの変化

1. 自立を求めるサラリーマンとライフスタイル

(1) 仕事面

企業など組織で働く所謂サラリーマンにとってライフサイクルの基本的枠組は、年功序列制、終身雇用制、企業別組合が相場であった。勿論、これらが企業経営にとっても基盤であることに相違はない。しかし、サラリーマンにとって、企業内での階層を一段ずつ昇り、社会的な地位と富を得ようとする従来からの基本スタイルは、その魅力を徐々に失いつつある。

企業に就職する学生が、大企業、高給与、安定性を以前ほど志向しなくなったことは、サラリーマンのライフスタイルの変化を予兆させるものといえよう。大企業に入れば、同期の社員との熾烈な出世競争があり、高い給与には厳しい仕事、あるいは長時間労働があるなど、自己の生活の犠牲を伴うことが認識されてきたのであろう。会社に対して自身を無条件に提供するという姿勢は、依然として残りはするが、近い将来は少数派になりつつあることが予見される。すなわち、会社よりも、自己の生活、信条、ライフスタイルを大切にしたいサラリーマンの割合が多くなると考えられる。選択肢が多様化したともいえよう。

彼らの企業に対する考え方は、企業を自己実現の手段とする、換言すると企業における自己の仕事を通じて、自己のスキル、経験を築き上げようとする姿勢である。その結果がたとえ企業における階層を昇り詰めることにならなくとも、それ自体が必ずしもサラリーマンとしての究極的な目標でありえなくなった現在、とくに意に介さないサラリーマンが現実の姿となりつつある。企業の目標である利潤の追及は、ややもすると社会的な行動を逸脱して批判を浴びたり、犯罪者として社会から葬り去られる結果になるのを目の当たりにしてきた若い世代から見れば、この様なライフスタイルの選択は当然の帰結とすべきであろう。

まして、大企業の経営者がスケジュールの消化に追われて、自己実現はおろか、家族との時間も取れない現実を肌で感じるようになると、サ

ラリーマンの中にそれを望まない層が増えてくることも当然である。

とはいうものの、自己の生活を安定させる収入の確保もサラリーマンにとっては重要な目標の一つである。この基盤があってこそその自己実現であるという反論があって然るべきでもある。しかし、バブル経済が崩壊した現在、各企業では事業の再構築に取り組んでいるさなかである。企業にとって最も大きなコストである人件費の抑制のため中高年サラリーマンの勧奨退職、管理職の希望退職などが行われ、戦後の日本的経営の一つであったサラリーマンの終身雇用制は揺らいでいる。

世界的なコンピュータ・メーカーの日本法人では、新たな中高年サラリーマンの勧奨退職プログラムが発足した。予め定められた期限内に自らが会社の事業を支援する事業をスタートさせて自立するというものである。もとより、経営環境が厳しくなった同社の再構築の一環としての方針ではあるが、日本企業においても採るべき道の一つを示しているとも言えよう。50歳を過ぎての再就職は、大学を卒業したばかりでの就職とは企業の求める資質が異なるのは勿論、支払う給与額という点で、企業側の収支にも大きく影響する。

このように、再就職する側と受け入れる側との間には大きなギャップが存在する。したがって、同社のように独立して事業を営めるように、所定期間、会社がその独立準備を支援しようとするのも頷けるのである。ところが、それまで企業の仕事を受動的にこなしてきたサラリーマンが、能動的に事業を運営するのは簡単ではない。企業内のキャリア・プランを、入社間もない時期から自己の確立を意識せずに過ごしてきたサラリーマンにとって、直ちに社外で生かせる専門性、人脈、スキルを求めるのは酷と言えるであろう。

一方、そのサラリーマンを雇用する企業側の人事戦略にも、大きな変革が求められている。定年が延長されて、60歳定年が常識化してきた現在、景気の変動によって企業側が40歳代、50歳代での早期退職を求めるとき、企業側が単なる事業再構築のみにとどまらず、その担い手たる社員と企業との関係を真剣に見直さなければ、従来より社員の企業に対する忠誠

心に依存してきた企業経営は、たちまち活力が削がれてしまうであろう。

(2) 企業人

企業への就職がすなわち社会人への第一歩と言われているが、実は企業という傘の下で保護された、条件付きの社会人であったことに気付かされる。それは会社を通じての社会との一面的な関わりであった。通産官僚であった堺屋太一氏の著作、『団塊の世代』は10年以上前に書かれた近未来小説であるが、現在の環境と対照させてみても、それほど違和感は覚えない。このオムニバス形式の小説はいずれも団塊の世代に焦点を当てたものであるが、企業に勤めるサラリーマンの将来像を描いたものとも言えよう。すなわち、いずれのケースも会社人間が自分の勤務する会社から外に出されるという、従来は存在しなかったライフサイクルを描いた点が衝撃的であった。

現在は団塊の世代が企業において中核的な管理職にある時代になりつつあり、その実像は小説『団塊の世代』に限りなく近付きつつある。しかし、その変化は、時々の景気にも左右され、むしろ緩やかに推移したとも言えよう。したがって、サラリーマン達は自己の生活に投影する余裕はあったにせよ、その間に企業の担い手である管理職にもなったりしており、必ずしも自己のアイデンティティを確立するための行動をとっていたとは言えない。

(3) 自立化をサポートするツール

サラリーマンの自立は、本来そのサラリーマン自身の意識に依存するものではあるが、到来しつつある情報化社会で自立するためには、それなりのサポートは必要であろう。一方、企業で培ってきたベテラン・サラリーマンの知識や経験を簡単に捨象してしまっては、社会の損失でもある。

これらサラリーマンをサポートする、或いは企業にとっても情報化社会の求める知的ノウハウを効果的に集約するツールが必要とされている。

年齢が上がるにつれて、パソコン、ワープロ、FAXなど情報機器の活用程度が低くなるのはやむを得ないところではあるが、個々のニーズを救うツールとしてはきわめて有用であり、積極的に活用するべきである。若い世代にとっても、企業からの自立を望む場合はこれらのツールは有用である。

人的なネットワークは仕事の上での繋がりのみならず、自立のためにも社外のネットワークが不可欠であろう。一方では、これを満たす社会的なツールの整備も必要となる。現在、その端緒となる好例はパソコン通信であろう。わが国では商用のパソコン通信が、商用のデータベースとリンクして、ビジネス情報などを提供しつつあるが、その広がりには未だ限界がある。草の根ネットワークも無数に存在するが、娯楽あるいはその延長に過ぎないものが多い。文字で伝えられる情報に限られる点でも、現在のパソコン通信では利用範囲の限界がある。また、パソコン通信はその用途がオールラウンドであるため、利用者側の質も玉石混淆である。社会的なツールとして定着するためには、より専門化した分野のネットワークを運営するオペレータの誕生が望まれている。

(4) 家庭面

家庭における家族同士のコミュニケーションは、ひところの一家族構成員数が急速に減少する核家族化から、むしろ三世代住宅など、世代間の同居を望む方向へ戻る傾向が見られる。また、サラリーマン家庭では子供の教育を最重要視することから、大都市では単身赴任など単身者世帯が増加する傾向もある。親子、夫婦間のコミュニケーションは、子供の躰など生活の基本的な要素を考慮すると、face to faceのコミュニケーションが最も望ましいと考えられている。

しかし、種々の理由から一時的な家族の散逸を免れないとすれば、それをサポートするツールが望まれる。企業の中には、単身家族世帯に限定して、テレビ電話を無償で貸与するところもある。しかし、当初の使用の新鮮さが失われると、いつの間にか放擲されている。人と接する際に

得られる感覚的な情報がテレビ電話では得にくい、また、様々なコミュニケーション上の障害ともいえるべき煩わしさが伴うからであろう。

(5) テレコミュティング

現在の東京圏の過密化は、さらに一層の住環境の悪化を招いている。これが家庭における家族のふれあいに影響を及ぼさない訳がない。より自然があり、広い住居を望めば都心から50、60km離れた郊外に居を移さざるを得ない。当然、通勤時間は2時間を超え、家族と共に過す時間は削られてしまう。一方、大都市の利便性を求め、通勤時間を短くしようとすれば、きわめて劣悪な住居と住環境を耐え忍ばなければならない。幼い子供の成長過程では、郊外の自然とふれあう環境、また親子が共に過す時間が重要であることは言うまでもない。

ホーム・オフィス、サテライト・オフィスなどのテレコミュティングはそうした矛盾を解決する一つの方策であろう。その採用には企業の決断が必要であり、また、それをサポートする情報通信機器、ソフトウェア、社会的なインフラの整備が不可欠である。様々な実験が行われ、企業活動の全てをテレコミュティングで分散化する事は困難であることが明白になりつつあるが、既述した企業とサラリーマンの関係を見直す上で、企業側がコスト・アップを回避して、有為な人材を確保する手段として評価されるべきであろう。

(6) 社会生活面

サラリーマンが真の社会人として自立するためには、企業内あるいは仕事を通じての付き合いという枠を超える必要がある。社会との接点が企業のみというのでは、その範囲は、あまりにも狭い。家族、親戚、企業、学校時代の友人、企業での仕事を通じての企業外サラリーマンとの付き合い。いずれも限られたものであろう。

とりわけ、サラリーマン一般の地域の住民との付き合いは、きわめて希薄である。自分が居住する地域で起きた出来事でさえ耳に入らない。

ケーブルテレビなどの地域に密着した新しいメディアが存在するが、コミュニティの情報通信手段としてはまだまだ未成熟である。地域の情報提供はほんの添え物で、商業的に成立する多チャンネル化などの娯楽面に重点が置かれている場合が多い。ネットワークのハードウェアは、技術の進展で商品化が進んでいるが、利用技術面では遅れが目立つ。地域の活性化という大きな命題を抱える自治体にとって、情報通信インフラ、しかもハードのみならず、その利用面を主とする運営面に力を注ぐべき時期が到来している。知的な活動を継続するためには、視野の異なった人々との交流が不可欠であり、地域はその一翼を担う宝庫であるにもかかわらず、適切な手段とオペレータを欠いているのが現状と言える。

(7) 健康面

近年は食糧事情の豊かさを反映して、飽食の時代と言われている。一方で、成人病予防、健康管理に対する人々の関心は高まっている。カロリーの過剰摂取は、長期化すると循環器系の疾患につながり、若い時代からの摂生の重要性が認識されるようになった。このニーズに呼応して、ジョギング、ダイエット、健康食品などのブームがあり、そして近年ではスポーツ・クラブの商業化が軌道に乗るようになった。

一方、企業では社員の定期健康診断、人間ドックなどの健康管理に力を入れるようになってきている。健康維持には日常の運動、食生活がキーポイントではあるが、万一病気になった場合の医療面、つまり医療体制に対する危惧は誰しも持っている。それまで健康であった人が、医者 of 診断を受けに病院に行くには決して低いとはいえないハードルが存在する。

精神衛生上の健康管理もまた大きな課題である。ストレスが健康面に及ぼす影響は、未知の部分が多いとはいえ、鬱病や突然死などの現代病とは無関係ではないであろう。しかし、カウンセラーなど精神医療の体制はきわめて貧弱である。医療に関するカウンセリング、日常の健康診断を家庭で行えるような体制が望まれる所以である。血圧測定などの簡単なデータであれば、すでに市販されている商品で行えるが、それだけで

満足できるものではない。専門家である医師の判断を家庭で受けたいとするニーズは確実に存在しよう。

(8) ハイパーネットワーキング社会

企業においてはすでにダウンサイジング・ブームの影響で、LANという形でパソコン・レベルでの情報資源の統合化が推進されつつある。また、LAN相互の接続も様々な形態で試みられているところである。企業相互のネットワークが接続されて、コスト、場所を超越して売上、利益を増加させることがその目的である。

金融、サービスなどのネットワークはわれわれに図り知れない利便性、効率性を提供してはくれるが、われわれのニーズには合理性の追求に整合しないものも多い。人間相互の交流などはその典型的な例であろう。また、創造的な活動もその例であろう。このような場面においても適切な支援がコスト、場所を超越して得られるネットワークが求められている。その姿が、ハイパーネットワーキング社会である。

2. 自立を求めるサラリーマンの実例

以下は、自立を求めるサラリーマンの実例として、各人に生活の現状と今後の考え方をインタビュー形式で報告するものである。

(1) 実例1 (Fの場合)

①仕事面での現状と将来ビジョン

・現状のポジション／立場

九州の地場建設会社から出向で新設の公益法人（ハイパーネットワーク社会研究所）の開設スタッフへ移行中である。

・現在までのキャリアパス

総合建設会社の事務部門スタッフ、現場管理、一線営業までいわゆるゼネコンのスタッフ業務はひととおりこなしてきた。

- ・将来のビジョン

当面は新規プロジェクト（ハイパー研）に全力をそそぎ、数年後、軌道にのったところで、出向元に復帰するか、そのまま居残るか、まったく異なる方面をめざすことになるかはいまのところ未定である。

- ・そこでの価値観（何を大事と思い仕事に取り組むか）

ホームエリアをドメインとする通信ネットワーク事業の構築にあたって、これまで軽視されてきたユーザーの視点を尊重したシステムづくりと、日常感覚をとりいれたネットワーク環境の整備の指導に取り組みたいと考えている。

- ・具体的な将来の仕事のイメージ

ハイパーネットワークに関わるあらゆる現象の分析と今後の予測、具体的にはコンサルタントとシステム設計の境界分野になるのかもしれない。

- ・そこで必要とされる情報機器

5年先は正直言ってまったくわからない。私自身は今のワークステーション+画像処理機器レベルのものを使っているだろうし、エンドユーザーの平均はやはりハイエンドパソコン、またPCS（パーソナルコミュニケーションシステム）のようなものも出てきているだろう。

- ・自分と情報面での社会インフラ等との関わり

まさにそのあたりの現状分析と将来設計を行うわけだが、端的に言えばとくに制度面での不備と全体ビジョンが根本的に問題で、当面そのへんを重点的に攻めていくことになるであろう。

- ・その他仕事について

まったく新しい組織を立ち上げるので山のような雑用があり、とくにこの面においては情報システムがほとんど役に立たないことを痛感している。知識処理にいささかでも携わる人達のネットへの参加が一日も速からんことを願っている。

②家庭生活面での現状と将来ビジョン

・現在の家庭状況

妻一人子供二人、絵に書いたように典型的な都会のサラリーマン家庭ですな。

・将来予想される家庭状況

家でいろいろな知的作業を可能にする環境作りをする。そういう質間ではないのかな？ま、（実際そんなものがあるのか知りませんが）普通家庭です。

・どのような暮らし向きをしたいか

地道な暮らし、モノに溺れず、中身を評価できるようなくらしをしたい。

・子供とどう接しているか、将来どうしたいか

まだ小さい（4歳と0歳）ので接するものにもないが、F家は自由放任、やりたい放題がモットーで責任も自分でとりなさいです。それでは無責任と言われたりもするが、ますます変化の激しくなる将来、特定の価値観だけを押し付けるのは子供の将来にとってけっしてプラスにならないだろうという信念に基づいています。

・どんな家がいいか、そこではどんな情報機器類が入っているか

これはむづかしい、できれば情報機器はオールインワンの1台であって欲しいが、過渡期はむづかしいでしょうね・・・あまりけばいのやおどろおどろしいのは勘弁してほしい、昔のライティングビューローぐらいが私の具体的なイメージです。むしろ近くにコンビニエンスや図書館、書店があるほうが余程いいですね。

・家庭や親戚間でのコミュニケーションのためのインフラはどうなっていたらいいか

さて、これは現状の電話と郵政省メールで十分な気がします。生活時間帯が異なる人が若干含まれるので、家庭用のファクシミリや留守番電話がもう少し普及して使い易くなるといいんでしょうが、あまりこういった血縁的なファクターは次第に生活面でのシェアを落していくと思うのですが？

・その他

家庭をひとつのパフォーマンスステージにできるような仕組みを考えられたらいいですね、地道に暮らしていても何か人に示したいモノがあって、そうしたものを気負わずにパフォーマンスできるようなコミュニティが理想です。

③社会生活面での現状と将来ビジョン

・現在どのような人脈や交友関係などをもっているか

手帳の住所録の分類は

建設会社

得意先

同業者

社内

その他仕事に関する社外活動の知合い

大学

ネットワーク（この領域が肥大化して仕事になりつつある）

コアラ

その他（主にパソコン通信業界）

会合

S A S

いろいろな会

いろいろな委員会

友人

主に同窓関係

親戚

妻の関係

妻の友人

ご近所

・それはどのように築いてきたものか

かける時間に比例して人脈は広がっていった、そういった意味では積極的に築かれたものではないし、嗜好や性格などが片よっているのかもしれない。しかしパソコン通信をしているとほんとに世の中は広いというかいろいろな人がいるものだと感心している。そういう意味でコンピュータネットの広がり期待している。

・将来はどのようにしていきたいと思っているか

【常時の付き合い】

これは同じ仕事や仕事以外でもプロジェクトを起こして付き合いしていくしかないのではないか、そういった意味でなにか共同して事業と迄はいかないまでも、いろんな活動をしていくことは重要であろう。

【随時の付き合い】

発想の異なる人とたまに討議することも必須である。高邁な議論から下世話なネタにいたるまであれこれと網を広げておきたい。しかしとくに飲むと時間をとられていけない、東京は人はたくさんいるが会って飲んで帰ると翌日にまで影響を及ぼすのはやや考えものである・・・何かいい方法はないものか・・・。

【消息確認】

年賀状以外にも郵政省メールをもうちよっと活用したい・・・個人ニュースレターといったものを習慣づけるというのはどうだろうか

・人とのつながりといった点でもっとこうしていきたいという点は何か

どうしてもとことん付き合うか、まったくお付き合いをしないかという両極になりがちなのは人の常であろうか。そうしたあたりで「仕事の上の付き合い」というのはけっこうわかりやすい。仕事以外にもこうした分離性のよい付き合い方が考えられそうなものだが実際はなかなかむづかしい。

・そうした将来ビジョンにてらして、どのような情報機器類があれば

いいとか

ま、なんでもあればよいというか、パソコンのお化けみたいのやら、テレビになにか操作盤がついたものとか、高機能な電子手帳、ゲーム機にいたるまでその人の生活で一番使いやすいものであっていいが、（ここが重要）それらが互いにリンクできるネットワークで繋がるようになるというのがポイントでしょう。

- ・そのような情報機器類や情報インフラがあれば、どのような未来の交友関係人脈を築けると思うか

しかし、現状以上に人付き合いに時間を割けるわけではなく、要は選択肢が広がる・・・そこそこの付き合いが可能になる、「地域上のお付き合い」とか、なにかそういった幅の広い人付き合いを可能にしてくれる機器と雰囲気が必要なように思います。そのためには使いやすい情報ツールとお互いに違った情報ツール同士をうまくリンケージしてくれるような情報インフラが必要だと思っています。

- ・ボランティア活動等の社会へ対しての働きかけの活動は何か行っているかとくに行っていない。
- ・そうした事にたいしてどのような考えをもっているか

ボランティア活動とわざわざ唱えるような活動は好きではない、個人のレベルでできることは概ねやるようにしている。組織でないとできないことは、全員がボランティアという組織形態では極めてむづかしいことをあちこちで実感している。中核には仕事かあるいは同様な使命感を持つコアメンバーが必須なはずで、そのあたりの方法論がきちんとできていないとこうした組織の維持は難しい。しかし、そうした組織が、これまた私自身の好みではないので、結果としてこのような活動から遠ざける結果となっている。しっかりしたコアメンバーとそれを支える中核、シンパとしての理解者がうまくからみあっているような組織があればお目にかかりたいものだ。

- ・情報機器類との関連で将来ビジョンとして何か考えることがあるか

こうしたぐじゃぐじゃした人間関係にたいし、とくに知的生産活動

においては、従来の方法論を打破できる可能性があるように思う。
そうしたふたつの意味でのネットワークの重なる活動を考えている
のだが、その前提としての情報インフラが必要だと切に思う。

④健康面での現状と将来ビジョン

・現在どのような状況か

とくになにもなし。だから、健康かということそういうわけではない。

・健康を維持し体力をつけるといったような何か健康面での活動をしているか

とくになにもしていない、つとめて歩くようにしているぐらい。

・将来的にはどのように考えているか

このままでは将来ドンとくる恐れがあるので何かしないといけ
ないが、やっぱりなにもしないのだろうな。

・医療面の社会インフラのことなども含めて、自分の健康と情報機器
あるいは社会の情報インフラといった事との関連で何かイメージで
できることかあるか

医者が必ずしも近くにいることはないが、ヘルスコンサルタント
のような職業はあっていいと思うし、これから出てくるだろう。法
律で医療行為が対面診療に限られているのは問題、オンライン診療
ができるような法改正が必要でしょう。その他画像伝送はひよっと
したら医療分野がいちばん進んでいくかもしれません。

・家族の健康といった事を考えて何か思うところがあるか

心の健康を心がけておけば、なにが起きても大丈夫（たぶん）。

⑤精神面、生活信条面での現状と将来ビジョン

・何を生きる上での重要な事項として生きているか、生活信条は

平常心、好奇心。生活信条は日々平穏であればよし、ただ物好き
な性分は押え難くつい首をつっこんでしまうのがいけませんね。

- ・そうした考えに至った経緯があればそれは何か

ふむむ、ま、人との接触体験、その他先人の智慧などなのでしょうか？

- ・その信条に照らして、現状はどうか

ですから、つい深く関わってしまっただけで往生するということがじつに多いのです。ネットワークは気楽な部分もあって（もちろんリアルワールド同様にシビアな部分もある）なかなか気にいっています。

- ・宗教などに関しての接点があるか

そうですね、むかし仏典を読みあさった体験が底深く反映しているかもしれませんね。

- ・上記のような点と、情報機器や情報社会の発達といったことに関して何かあればお答えいただきたい

サイバースペースとリアルワールドのリンケージが今後どう生活に関わってくるかすごく興味があります。

- ・精神生活面ではどのような社会の将来ビジョンを望ましいと思うか

ひとつに多様性を重んじる。ただし、個性を尊重ではなく共生といったある種東洋的な感性で考えています。

- ・それと情報社会はどう関わってくるか

思考の変化はシステムに当然反映するはず、その逆もあるはずで、そうした変化をうまくとらえていきたいが、実際はむづかしいでしょうね。

- ・その他、精神、生活信条関連の諸々

多くの人が21世紀は宗教の世紀とみなしていますが、私も精神世界の部分の影響がますます大きくなるものと思います。

⑥ 娯楽教養面での現状と将来ビジョン

- ・何が趣味か、その現状は、また将来ビジョンは

まず、娯楽と教養を同列にみることに異論があります。本来教養とは辛く孤独な求道のものだと考えています。ま、そうした議論はおい

といて私自身の趣味というところ・・・いまは、そういえば何もやっていませんね。ネットワークへの書き込みがいま楽しみというか、いきがいのようになっていることは確かですが、そうこうしているとすぐに管理運営の問題が出てきて、その書き込みもできなくなるというジレンマはありますね。

- ・どのような面で楽しみを自分に与えていこうと思っているか

楽しみなのだから、楽しめばよいわけで、できるかぎり負担を感じないようなモノがよい。そんな質問ではないのかな？ともかく精神面での楽しみですな。

- ・そうした点と情報機器類の発達や情報インフラの整備とか関わってくる、あるいは何か期待するところがあるか

これは、これからの活動のメインテーマなわけですが、現状はまだビジョンを示すというよりは、現状の問題点の整理がまず先でしょう。そもそもこうしたユーザーレベルでの議論の場が極めて限られていること自体が問題ですし、そうしたあたりから攻めていきたいと思っています。

- ・自己を成長させるための自己啓発といった分野に関心はあるか

あまりないですね。

- ・そうした観点と情報機器類との関連でイメージできることがあるか

なんかあやしげな自己啓発ソフトなるものが続々と出てきそうな予感しますが、ユーザーもアホではありませんから売れないでしょうね。ネットのおかげでソフトは一般に売れるものと、特定のユーザー層に受け入れられるもの、そしてまったく売れないものとははっきりしてきています。またネットワークそのものが世間と同じくきびしい自己啓発の場ではないかと思っています。

- ・その他娯楽教養関連の諸々

最近大学などという所に係わっているおかげでいわゆる知識人と言われる人達とのお付き合いができましたが、知識で飯を食っている、あるいは食おうと思っている人達はかなり早く、それこそ十代

からそうした心構えができているわけで、その蓄積量たるや半端なものではありません。そうしたレベルと趣味としての知識教養とはたいそうなギャップがあるなど感じている次第です。（もっとも専門外の話は別ですが）

(2) 実例2（Aの場合）

①仕事面での現状と将来ビジョン（立場／キャリアパス／価値観）

【立場】

- ・現在36才、会社の中では実働部隊の中堅である。営業開発的な業務を担当しているため不況になっても仕事が忙しい。従来のやり方では客先の満足を得られないため、仕事のやり方は試行錯誤である。50代以上の幹部クラスには世の中の動き、客先が求めている仕事の内容について理解できない人達が多い。昔ながらのやり方に立脚した指示や意見が多く、もはや手を動かさなくなった彼らは企業の中で無用の長物と化している。彼らに一番不得手なことは企画する能力である。一から始めるための企画作成や実施項目、スケジュール管理が理解できないらしい。恐らく、若い頃は仕事を消化するだけで精一杯であったからであろう。
- ・自分の個性は、なんでも一応対応できるということである。特別専門分野を持つわけではないので仕事の領域が決まらない。逆に、専門の人間がいない仕事回ってくることが多い。トップの原稿書き、事業計画、マーケティング、コンセ企画、タスクフォース型のプロジェクトでは調整役、場合によってはリーダー的にグループを引っ張ることもある。

【キャリアパス】

- ・会社の中で技術職でいて専門を持たないことは辛い。しかし、専門を持つことである限定された領域の仕事しか担当できないということもつまらない。私は、なんにでも対応できるマルチエンジニアでいたいと感じている。どんな技術の話でも一応理解できる。さらに専門的な

話は誰に相談すればいいかわかる。社会の動きや他産業の実態に精通して、それらの情報を企画に反映し、普通のエンジニアでは思いつかない発想や情報を組織の中に入れ込む。そんな人物像を日頃目指している。自分の目指したいキャリアパスと会社が求めるキャリアパス（専門性の開拓）には隔たりがある。自分流には、依頼された仕事は断らず、なんでも対応する。それによって、新しいスキルの開発、情報の蓄積、人材ネットワークの拡充をどんどん強化することである。

- ・会社が求めるキャリアパスについては関心がほとんどない。自分のやり方が結果として会社のためになるという強い信念を持っている。そればかりでなく、新しい人材開発のあり方を会社を示してあげたいとさえ感じている。

【価値観】

- ・会社のために自分を犠牲にする気持ちなどない。ハッキリ言えないが、どちらかと言えば会社という場を活かして社会の役に立ちたいと思っている。職場の人はそのためのパートナーであり、競争や口論はしたくない。会社の人達も社会の一員である。むしろ社会のために彼らと気持ちよく働きたいと思う。
- ・自分には出世欲があまりない。上司の言うことに絶対服従で、そのために部下を徹底的に使う人達を目の当たりに見てきた。そうはなりたくない。そんなやり方がいつまでも続くとは思えない。結果として出世した時に、自分流のやり方が正しかったと確認する程度にしか考えていない。どこまで上にいっても上司はいるもので、上下関係の縛りは逃れられない。

【情報・手段】

- ・以上のような仕事のスタイルを目指しているので、情報と言えば「ネットワーク」である。社内、社外問わず多くの人とのコミュニケーションが大切である。誰でも知っている人脈では価値がない。少なくとも仕事を介さない人脈を開拓していくことが必要である。

「SAS」はもともとそういった目的で参加したわけではないが、いろいろな人材や意見に遭遇し、大いに自分の肥やしになったことから逆に上記のような考えが自ずと育っていったというのが本音である。

- ・情報システムで言えば、日経テレコムのようなデータベースを活用し、時間のない中で担当する領域（市場、技術）の概況を判断するためによく利用している。肝心なところはやはり見学やヒアリングになる。
- ・さまざまなネットワークを活用することも考えているが、コンピュータに弱いという先入観と時間がないという都合のいい言い訳から実現できていないのが現状である。

②家庭生活面での現状と将来ビジョン（現在状況／教育／親戚／扶助）

【家庭・現況】

- ・家族は、妻と子供二人（小2と五才）、妻の親と妹と同居している。家族は7人。
- ・親は、子供にとって「社会を見通す鏡」であると思っている。家の中で会社の話題や社会の話をすることはいけないと感じていない。子供にとって無意識に会社や社会を知ってもらうことこそ親の役目である。
- ・家の中では、子供に厳しい妻と優しい祖父母の対立がしばしば起きている。子供のしつけである。どちらの言い分にもそれ相応の理由があるわけで判断に困ることが多い。子供に対して親の意見は一つをモットーにしていきたいが、なかなか上手くいかない。
- ・毎年一度、家族と大型旅行に出掛けることにしている。子供の成長を確認する場になっている。小2の娘は出掛けた先で一番早くいろいろな情報を持ってくる。あそこに何があるなど・・・。

【教育】

- ・毎日のように子供にダイレクトメールが届く。「只今、無料でお子様の学カテスト実施中」など。
- ・子供にとって受験地獄がいいことではない、と思ってもそれに流され

ることになりそうな気配を感じている。もっと遊ばせてあげたいと思っても、友達がみんな塾では友達も塾へいかないとできない。自分が勉強を見てあげようと思っても時間が充分にとれないし、むしろ昔の勉強方法では通用しないと言われると自信がもてなくなってしまう。

- ・せめて、教養や人との接し方、思いやりなどを休日一緒にいることでなんとか体得してもらおうというのが精一杯である。教育の問題は社会の問題として捉えて早期解決の方向へと向かっていくことを切に願う毎日である。
- ・子供にファミコンはやらせていない。私が、家でワープロをたたいていると異様にキーボードに興味を示す5才の子供がカーソルを動かしながら画面上に絵を書いている。
- ・特にパソコンネットワークを行っていないので、私が家で行うことはワープロで原稿書きである。

③社会生活面での現状と将来ビジョン（交流・人脈／社会参加）

【交流】

- ・「SAS」では異業種の人達とのコミュニケーション開発、自己啓発（社会状況に対する鋭い指摘や考え方）の場である。古い友達は、心からの親友である。親友と付き合う上で目的などない。一緒にいるだけで楽しい。
- ・大学、高校時代の幹事を受けている。去年、17年ぶりに高校時代の学年同窓会を開催した。非常に楽しかった。参加者160名。これを機会に、オリンピック（夏／冬）の年に毎回行うことにした（隔年）。次回は平成6年6月26日（土）と決まっている。準備会としての事前の幹事会が特に面白い。みんな苦勞しているし、勇気付けられることが多い。
- ・地域とのコミュニケーションでは、高校時代のネットワーク、スポーツクラブを介した交流が生まれつつある。

- ・社会参加、とりわけボランティア活動は目下行っていない。なにかしたいと思っているが、行動が伴っていない。時間に余裕がないことが一番大きい理由かもしれない。やる気がないから、と言われればそれまでだが。

④健康面での現状と将来ビジョン（維持／医療制度）

- ・最近、家の近くのスポーツクラブに通っている。週に1、2度出掛ける。主に週末。内容はバイクと水泳である。きっかけは、子供がスイミングプールに通っており、待ち時間が勿体ないと思って自分も汗をかくことにしたからである。
- ・40才までの4年間に体の再整備を行っておきたいと思う。これが私の現在のキーワードである。泳ぎも上手になりたいし、持久力をもっと高めたい。努力の結果が現れつつあり、効果があればさらに自己啓発にも力が入る。
- ・週末子供も一緒に泳げる時間があるのでコミュニケーションの一環にもなっている。

⑤精神面、生活信条面での現状と将来ビジョン（思考経緯／宗教）

【信条】

- ・私の信条は、1)「色即是空、空即是色」、2)「泣いても一日、笑っても一日」、3)「己を知る」の3つ。1)については無欲で精一杯努力すること。結果は後から付いてくる。もし結果がでなくても、自分のスキルアップに必ず役に立っている筈。2)については、どうせやるなら楽しくしたいということで、仕事もやらされているという受け身よりも、やってあげている、だから多少の失敗も覚悟の上といったように幾分楽観的に考えて楽しくやっていく。3)は、自分はいくらでも裏方に徹して目立ってはいけな。すぐ調子に乗る性格であることを知っている。猿歳である自分は小さい頃から「猿も木から落ちる」という諺が耳にこびりついている。自惚れや自己満足は最も危険で、

完全な人間などいない。なんのとりえもない自分は人さまから教えて戴いて勉強するわけで、人の話を聴かなくなるとは自分自身の成長がなくなってしまう。自分にできる限界を知ることが基本である・・・ということ。

【宗教】

- ・特にない。最近、実家のお墓の改築でお寺さんや石屋、親戚との付き合いがある。お墓ひとつからいろいろと学ぶことが多い。親戚付き合いも活発になっている。相手は60代であるが、昔の話が聴けたりで勉強になる。子供も一緒にお寺に連れていく。棺の出し入れを見せたり、お墓のできる経過を見せたり、しつけの一環としている。いろいろな場面を見せておきたいと思っている。

⑥娯楽教養面での現状と将来ビジョン（趣味／自己啓発）

【趣味／自己啓発】

- ・特にない。目下、持久力をつけるためにスポーツクラブに通うことくらいか。
- ・あえて言うならば、家庭、地域社会、会社、社会に対して自分なりの接し方、マインドを持っている。言葉にすることが難しいが、それらは独立して存在するわけではなく、日々の行動に活かさなくてはならない共通した理念がある。カッコよくいえば、感謝の心であり、何時でもどこでも日々精一杯生きていることである。

(3) 実例3（Sの場合）

①仕事面での現状と将来ビジョン

- ・現在のポジション、立場

（株）志木サテライトオフィス・ビジネスセンター代表取締役で、P I サポート研究所の所長をしている。

- ・現在までのキャリアパス

大学院で建築史を専攻し、後に（株）GKインダストリアルデザイン

研究所で研究員、あるいはマーケッターとして研究、マーケティング、企画の仕事をし社外勉強会をとおしてP I（パーソナル・アイデンティティ）の本を書き、後に独立し（株）P Iサポート研究所を設立。今は社名を変えて志木サテライトオフィス・ビジネスセンターとしている。

・将来のビジョン

私が持っている技量は、マーケティングリサーチや企画、研究であるが会社を起こしてからは経営者としてやってきている。今後は、マネージメントということを突き詰めていきたい。会社の経営状態は必ずしもよくはないが会社もうまく回るようにしていきたい。

・そこでの価値観（何を大事と思い仕事に取り組むか）

会社の理念は「P Iサポート」ということ。スタッフ、クライアントまた社会、地域の人々がP Iしていくことをサポートするというのが理念である。一人一人が自己確立、自立し社会に参画し、サポートしていくということが基本のコンセプト＝P Iサポートである。サテライトオフィスというのもP Iサポートの場として始めたが、今わが社でそれが反映されているかどうかを突き詰めていき、自分の思いと会社の現状とが合致するようにしたい。現在は、在宅勤務者サポートデータベースの構築に力を入れている。これも、P Iサポートの仕組みだと思う。在宅勤務をキーワードにしているので、会社まで来なくても家でも、地域でもどこでもできる。通勤地獄の中、都心まで通わなくてもよい。これ通じて、サラリーマンや主婦一人一人が仕事のプロとして自立して行くことをサポートしていこうとしている。

・具体的な将来の仕事のイメージ

在宅勤務者サポートデータベースを基に展開していきたい。中高年が退職後、濡れ落葉やワシ族と呼ばれないように生き生きと暮らせるような場をつくっていきたい。その人達がサテライトオフィス（コミュニティオフィス）の中で、今までのキャリアを生かした仕事を生き生きとしていければよいと思う。今までのアントレプレナの仕事や幼児

教育、翻訳等をコミュニティオフィス即ちサテライトオフィスの中に取り入れていくことで企業にとってもメリットがあり、企業の中のビジネスメリットは大きい。P Iサポートのコンセプトを基にして在宅勤務者データベースを展開していき、それらをメインに自分もP Iしていく。

- ・そこで必要とされる情報機器類等 (ex. こんな情報機器があったらいい)

基本になるインフラはパソコン、ワープロ通信が必要。電話、FAXができればよい。

- ・自分と情報面での社会インフラ等との関わり (ex. こんな情報関連の社会的仕組みができていたらいい)

情報社会において情報機器をうまく使いこなしていける仕組みをつくる必要があると思う。

- ・その他、仕事関連の諸々

去年、経営上失敗したことがあり、将来ビジョンは企業体として増殖して大きくしていくというイメージはあるが、旧来型なものとは違い社員は私1人で、動きに参画するという集合体企業としての形をとりたいと思っている。

②家庭生活面での現状と将来ビジョン

- ・現在の家庭状況

家族は、妻、娘2人で秋には3人目ができる。

- ・将来予想される家庭状況 (ex. 親の面倒をみる、マルチハビテーション生活etc.)

今、両親はここから1時間程の、東京都区内に住んでおり、私は1人息子なので将来は親の面倒をみるようになると思う。

- ・どのような暮らし向きをしたいか (どのような所にどんなふうに住みたいか/経済的には・・・)

自然環境の良いところがいい。情報機器を使つての仕事であれば

どこでもよい。自然があり、土と接することのできる農業や、今までの仕事が出来ればよい。

- ・子供とどう接しているか、将来どうしたいか（教育面では・・・）

小さい時は刺激を与え、色々なことに触れさせて、将来は自分の事は自分で選択すればよいと思う。

- ・どんな家がいいか、そこではどんな情報機器類が入っているか

マンションで、パソコン、電話、があり今後はホームオフィスとしてパソコン通信はとり入れたい。

- ・家庭や親戚間でのコミュニケーションのための情報インフラはどうなっていたらいいか（家庭から情報ネットワークが外へつながっていて・・・などということが必要か）

情報機器、テレビ電話があればよい。

③社会生活面での現状と将来ビジョン

- ・現在、どのような人脈や交友関係等をもっているか

会社を通しての人脈、社外勉強会（SAS等）、学会（日本生活学会等）、研究学会に属しているので、それらの交友関係。

- ・それはどのようにして築いてきたものか

色々なものに積極的に参加し、築いてきた。

- ・将来はどのようにしていきたいと思っているか

将来、お互いに成長しあうよう仕事面、趣味の領域面でも関わっていきたい。

- ・人とのつながりといった点でもっとこうしていきたいという点は何か
- ・そうした将来ビジョンに照らして、どのような情報機器類があればいいと思うか

交友関係の問題点は情報機器（ISDN、パソコン通信）が発達したからといって解決される問題ではなく、ビジネス、コミュニケーションにも生かせるようなアイデアが考えられるのではないと思う。

- ・そのような情報機器や情報インフラがあれば、どのような未来の交友

関係人脈を築けると思えるか

アイデア、方針が自分でも整理されてない。

- ・ボランティア活動等の社会へ対しての働きかけの活動は何か行っているか

アメリカではボランティア活動が盛んで一般市民が参画し、社会に貢献しているが今の会社のことで一生懸命なので、ボランティアまで意識がまわらない。

- ・そうした事に関してどのような考えをもっているか (ex. 老後のことなども考えて)

仕事を通して、ボランティア活動の根底の思想を具現化し好きな領域団体に参画したい。将来的には好きな領域での活動をしていきたいが今はしていない。

- ・情報機器類との関連で将来ビジョンとして何か考えることがあるか

反省としてデータベースの電話番号が検索できないので、ハンディなデータベースの情報機器があればよいと思う。出先で知りたいときに、すぐにわからないとビジネスデメリットなので必要。電子秘書のような簡単なインターフェースの機器があればよいと思う。社会生活面での潤滑油になるような細やかなもののサポート的な機器があればよいと思う。

④健康面での現状と将来ビジョン

- ・現在の状態は？

すこぶる健康な状態だ。

- ・健康を維持し、体力をつけるといったような何か健康面での活動をしているか

「瞑想」を去年10月から始めた。それ以後体調は良好で、風邪もひかなくなったし、ひいてもすぐになおるようになった。

- ・将来的にはどのように考えているか

将来は、もっと体を動かすことをしたいと思っている。ラグビー

などの激しいスポーツではなく、水泳や大極拳、気功などをできればよいと思っている。人間はもともと健康なものなのだが、ストレスなどのためにそれが損なわれ不健康な状態になっているのだと思う。

「気」という言葉があるが、人間が本来持っている力を出せるような健康法に非常に興味を持っている。その意味で、「瞑想」はもちろん続けるつもりだが、他にも無理無く続けられる軽い運動をしていきたいと考えている。

- ・医療面の社会インフラのことなども含めて、自分の健康と情報機器あるいは社会の情報インフラといった事との関連で何かイメージできることがあるか

今の医療体制を信頼していないわけではないが、もっと個人の本来持っている力を活かせる発想、つまり東洋医学的発想を取り入れていければよいのに、と常々思っている。病院に行くとかえって病気をつくられてしまうのではないか、という気さえしている。先述の「自然の豊かな所で暮らしたい」という希望とも関連するが、自分に内在する力が発揮できる所、自然治癒力を活かせる場での生活をしたいと思う。私には自然志向がとても強い。

かといって、霞を食っていく訳にもいかない。自然志向と経済面の充足を兼ね備えた生活方法を考えた時、田舎でも仕事が出来るとして、在宅勤務者サポートデータベースのような情報インフラの態勢が出来ていたらよいと思う。それが自分自身をも健康にすることにもなるし、多くの人が今よりももっと健康な生活を送ることができる方法ではないかと思う。

- ・家族の健康といったことを考えて、何か思うところがあるか

私自身の経験から「瞑想」はとてもよかったので、家族にもそれを勧めてみたい。また、水泳とか大極拳あるいは気功などの、家族で一緒にできるスポーツを皆でしていきたいと思っている。

⑤精神面、生活信条面での現状と将来ビジョン

- ・生きる上での重要事項はなにか、なにを生活信条としているのか

先程述べたように、P Iサポートということに、私はある種の使命感をもっている。それが私を生きさせている一つのキーになっていると思う。他人のためにというのではなく、私自身も本来ある生き生きとした自分を出していきたいという考えがあり、それがP Iサポートというコンセプトになっていると言えよう。自分自身が生き生きとできる社会にしたいという発想から、多くの人が一人一人生き生きと生活できる社会のしくみを作りたいという考えに発展したわけだが、それが仕事であるだけでなく、私の信条でもあると言えよう。

別の観点から言うと、「生まれてきた意味」を考える時、私は大きな目標として、「悟りを得る」ということを挙げたい。それはあまり悩まない生活をするということ。P Iということは、自分がしたいことをしながら他人に迷惑をかけず、むしろ他人を元気にしたり勇気づけたりできるということ。孔子の「己の欲するところに従いて矩をこえず」という言葉のようなもの。自分の好きなことをやって社会の役に立っていくというように、ごく自然に生きるのが悟りの境地と言えよう。宇宙というものは、フラストレーションが無く非常にバランス良く出来ていると思うが、そんな宇宙観と一体化する「悟り」のイメージとしてはある。生まれてきて良かった。嬉しい。楽しい。喜ばしい。そう言えるような感覚を常に持っていられる状態を私は「悟り」と称したわけだが、それが私の生きる目標ともいえる。

- ・宗教等に関しての接点は

多くの宗教が、上述のような理念を持っていると思う。だから私自身は特定の宗教団体に入ってはいないが、宗教的な感覚は十分分かっているつもりだし、宗教というものを肯定している。私は特定の宗教団体の一員ではないけれど、ある種の宗教に入っている—つまり自分だけの宗教を作りそれを信じている—というような感覚で

いる。

- ・それと情報機器や情報社会の発展といったことに関しての考えは

パソコン通信やワープロ通信のような通信を使って、以上のようなことを語り合いたい。またそのようなことが語り合える場があれば良いなあという希望はある。先程述べたように私は社会生活面では2千人くらいのデータベースを持っているし、知っている人はそれ以上にいる。年賀状のやりとり程度はしていても、それが有効に活用されてはいないのが現状。そのような人達とももっと生活信条面のことなども語り合いたい、時間もない。でもパソコン通信など使えば、こちらの発信を多くの人が受け止めてくれるわけだ。情報機器におけるコミュニケーション・ツールを使って、精神面のことなども語り合える人達と知り合いたいと思っている。

- ・精神生活面ではどのような社会の将来ビジョンを望ましいと思うか

情報機器がサポートして、精神面の語り合いの場が持てるようになればよいと望んでいる。

⑥娯楽教養面での現状と将来ビジョン

- ・趣味は何か？その現状と将来ビジョンは

先程述べた「悟り」のような精神世界のこと、人がどのようにしたら生き生きと生活していけるかという一種の心理学的なことに、とても興味がある。しかしそれが趣味かというと、仕事につながっていることでもあるので、趣味とは言えないかもしれない。強いて趣味をあげるとしたら、切手収集。もともと小さくてきれいな物が好きで、以前は熱心に収集していたが、今は時々買い求める程度。今後は、子供と一緒に遊べるようなことを趣味にしていきたいと思っている。例えば自然と接して、子供と一緒にキャンプしたり、温泉巡りをしたり、というようなことをしていきたい。また仕事とも関わることだが、自分で文章を書いたり本を著したりということは、今後も続けていきたい。今まで気付かなかったことに気付くというように、自分自身の成

長がはっきりと分かるし、達成感を充たされもする。切手収集のような趣味とは別に、仕事イコール趣味といえるような趣味があってもよいのではないだろうか。

- ・そうした面と情報機器類の発達や情報インフラの整備とがどう関わってくるか、あるいは何か期待するところがあるか

たとえばキャンプ情報にしても、誰かに教えて欲しいと思うことはある。自分でその関係の雑誌などで調べることはできるが、それでは不安だし、物足りない気もする。その方面に詳しい誰かが最初のオリエンテーションをして連れていってくれたりしたらもっとありがたいと思う。それが友人とか親戚の人とかであっても良いし、またコミュニケーション・ツールを使ってそんな人を探せるような事が出来たらよいなあ、と思っている。趣味の領域でも、そんなふうに人材を探す手段として活用できるのではないだろうか。そんなように、色々な人と知り合いになれる情報インフラがあったら良いと思う。

- ・自分を成長させるための自己啓発といった分野に関心はあるか

自己啓発にはとても関心を持っている。

- ・そうした観点と情報機器類との関連でイメージできることはあるか

たとえば、良いCD-ROMのソフトがその分野でも出てきたら良いと思う。自分が現在関心をもっていることに関して、似たような体験を持っている人もいれば、同レベルの人もいるだろう。CD-ROMなどを活用して、そのような人を検索し、教えてもらった意見と交流することができたら良いと思う。今後はそういう人間の精神面の成長やサポートのツールとしての使われ方が、情報機器にもできれば良いなと望んでいる。

(4) 実例4 (Kの場合)

①仕事面での現状と将来ビジョン

- ・現在のポジション、立場
-

現在、デジタル・テクノロジーを使った、データベース、コミュニケーション、ネットワーキング問題のアナリストとして電子情報サービス、マルチメディア、リアル・タイム画像処理、バーチャル・リアリティ、CBT、CALS、EDI、DTP等に関する執筆・講演活動を行うかたわら、コンサルタントとして日米のクライアントに対し同分野を中心とするプロフェッショナル・サービスを提供している。

最近具体的に行った仕事としては、ある企業からの依頼により、米国のアップル社マッキントシュ用の3Dソフトウェア開発企業への出資を含む包括的な業務提携を米国人のパートナーと一緒にまとめたり、米国からマルチメディア分野の専門家4名を招いてのセミナーを企画し、成功させた。

余談であるが、今回の提携に関して、日本国内におけるパソコンや3Dソフトウェアの市場調査を含めた関連業界の動向、提携先米国企業の信用調査、代理店交渉等の全てを米国人パートナーと二人で行って、正味1ヶ月でまとめることができた。

なお、今回提携をまとめた米国企業の日本における前総代理店から、独占的販売代理店契約上の仮の地位を定める等の仮処分命令申立事件として、当該米企業が東京地方裁判所に提訴され、また、賠償請求を求めた本訴訟を起こす準備がなされている。本件についても、日米の渉外法律事務所とタイアップして、ソフトウェアの著作権、知的所有権、トレード・シークレットの侵害に抵触するか否かについて、現在調査中である。

さらに、3月7日（日）から26日（金）の20日間、日本貿易振興会（JETRO：ジェトロ）の平成4年度における輸入促進を目的とした新規事業である短期専門家派遣事業の専門家として、カナダ、米国の9都市を駆け足で回り、主にパソコンやワークステーション用のパッケージ・ソフトウェアの開発業者や流通業者を対象とした日本のパッケージ・ソフトウェアの現状に関するセミナーの講師として参加した。さらに、具体的に日本市場向けに輸出を検討している企業及び、既に

輸出しているものの現在の代理店との間にトラブルを起こしている企業等に対し、個別コンサルテーションを実施した。

現在行っている仕事を一言で言うと、デジタル・ワールドを業務の対象とし、日米欧のそれぞれの分野の専門家とパートナーシップを組んで、企画、調査、マーケティング、コンサルティング業務を行いうるワンマン・カンパニーの代表である。現在、税金対策上、会社設立の準備を進めている。

・現在までのキャリアパス

大学を卒業してから、大学時代から親交のあった社長が経営する航空宇宙関係の専門商社に入社し、航空宇宙電子機器の輸出や英国メーカーのフライトシミュレータの国内販売関連業務、変わったところでは社長の特命プロジェクトとして日本商工会議所を母体とする日本スリランカ経済合同委員会が支援し、JICAから資金援助を受けたスリランカにおける農業開発プロジェクトにも参加する機会があった。

商社マン時代から、来るべき情報化社会の中で重要な役割を果たしうる情報サービス産業に関心を持っていたので、約6年在籍した商社を退職し、ご縁があった、SASの方が専務理事を務める通産省の外郭団体の財団法人データベース振興センター（DPC）で嘱託職員として働く事となった。

DPCでの仕事は、国内外の電子情報サービス産業の調査、「データベース白書」の編集業務、データベースに関する展示会や国際セミナーの企画・運営、マルチメディア・ソフト、ビデオ映像の作成等、大変勉強になり、充実もしていたが、自分のロマンを実現させるため、無理を言って7年間働いた、DPCを昨年9月末で退職した。

・将来のビジョン

まず、現在立ち上げようとしている米国企業が開発したインタラクティブなビジュアル・データベース構築用の3Dソフトウェアの

国内販売や、そのソフトウェアを使って、日本の産業界が作り出した各種の製品、商品、デザイン情報を3次元のモデリング・データとしてデータベース化し、パッケージ・メディアであるCD-ROMを使って世界に提供するというビジネスを軌道に乗せたいと考えている。

また、機械翻訳システムとドキュメンテーション・ソフトウェアを組み合わせ、航空宇宙産業や情報通信産業向けの多量なマニュアルをデジタルデータのまま翻訳、編集し、PCやWSをベースとした教育・訓練用にも使用できるシステムの開発を行いたいと考えている。このプロジェクトに関しても、具体的なアプリケーションをターゲットとして、日米の幾つかの企業とFSを既にスタートさせた。

さらに、今後のビジネス展開を考える上では、人材の育成が最大のポイントとなることから、日本国内のみならず、欧米の先進諸国を始め、アジア・オセアニアを中心とする発展途上国においても、デジタル・ワールドに対応しうる国際的な人材の育成にも積極的に取り組みたいと考えている。人材の育成が、コミュニケーションやパーセプション・ギャップに基づく、異なる民族、人種、国同士の摩擦や紛争を未然に防止するためには、最も重要であると考えからである。

このような事業を通して、日本と海外とを結ぶ架け橋となることが自分の使命、天命であると認識している。

・必要とされる情報機器類

現在行っている業務内容からして、コミュニケーションの手段として、パソコン、電話、FAXがなければ仕事ができない。特に、基本的な情報収集については、自分で検索するのみならず、アシスタントや米国人パートナーも使って、国内外のデータベースを頻繁に利用している。

携帯電話はまだ使用していないが、今後のコミュニケーションの手段として、音声のみならず、イメージ情報やデータのやり取りができる、コンパクトなワイヤレス・システムの購入を検討している。具体的には、携帯電話と携帯FAXであるが、ラップトップ・パソコンと

をつなげた利用を考えている。

海外とのコミュニケーション手段として、現在は電話とFAXが主となっており、電子メールは実験的に使っているのみである。今後は、仕事の性格上、欧米ではインターネットが主要なコミュニケーション手段として定着してきているので、なるべく早く使用できるような態勢を整えたいと考えている。

また、海外出張が多いことから、通信機能を持ったラップトップ・パソコンは今後のビジネスを行う上で必需品と考えている。今回のJETROの出張においても、ラップトップ・パソコンを持っていかなかったため大変不便な思いをした。

②家庭生活面での現状と将来ビジョン

【現在の家庭状況】

- ・家族は、妻と生まれて9ヶ月になる息子の3人。妻の母親と3つ年上で大手商社に勤務している未婚の義姉が、歩いて10分の距離にあるマンションに住んでいるので、ほとんど毎日のように行き来している。妻の父親は、仕事の関係で単身赴任しており、金曜日の夜自宅に帰って、日曜日の夜に赴任先に帰るという生活を送っている。
- ・妻は月と水曜日の週二日、渉外弁護士事務所で司書として、図書や資料整理の仕事をしている。そのため、仕事のある日は母親に子供を預けてから出社している。出社しない日は、育児の傍ら、時間のある時に資料整理を手伝ってもらっている。妻は銀行でOLとして働いていた経験があるため、お金の管理は家計も会社の経理も全て任せている。このことが災いして、家庭内での発言権が最近特に強まってきていることが気掛かりである。
- ・また、最近妻の勤務する事務所にリーガルベースを初めとする各種の法律関連の判例情報、雑誌記事のCD-ROMが導入されたり、オンライン・データベースを利用した調査という新しい仕事も増えてきている。また、今年中に計画されている事務所の移転に伴っ

て、全職員にパソコンを持たせたLAN構築により、コミュニケーション、情報管理、情報収集をネットワーク上で行う計画が検討されており、その対応について、弁護士も含めた職員向けの利用マニュアル作りや導入教育も任されているようである。このような仕事をしているため、私がコンサルタントをしている会社が巻き込まれている係争事件について、関係弁護士の略歴や関連資料や書籍の調査を手伝ってもらっている。

- ・この様に、現在の私の仕事と妻の仕事とがかなりオーバーラップしているため、家庭内での話題は、子供の事以外にも豊富にあり、妻との会話が楽しい。
- ・現在、賃貸の3DKのマンションに住んでおり、その一部屋を仮事務所として使用している。そのため、妻や子供と一緒にいる時間がサラリーマン時代と比べて多くなっており、日々成長しつつある子供の様子が手にとるように分かるため、子供と接していることが大変楽しい。
- ・将来予想される家庭状況としては、今すぐというわけではないが、妻の両親と同居することになる可能性が高い。私は4人兄弟の長男であるが、両親はまだ若く、また、次男で独身の弟と同居していることもあり、すぐ両親の面倒を見るような事はないと思われる。

【ライフスタイル、子供の教育、その他家庭関連】

- ・将来の希望としては、仕事上での必要性から、米国の西海岸に海外拠点としての事務所を持ちたいと思っているため、日本国内で多額のローンを組んで、70-80㎡の3LDKのマンションを4-5千万円で購入するよりは、場所にもよるが40万ドル、今の円の1ドルが110円という換算レートを適用すると4400万円も出せば、200-300坪の土地つきで、新築ではないが150-200㎡の4ベッドルームで2-3台の駐車場スペースのある住宅が幾らでも購入できるので、検討している最中である。今後の仕事にもよるが、私個人としては、純粋に経済的観点から考えれば日本国内に住む必要は全くなく、仕事で必要な時に日本に出張するという生き方もあると考えている。ましてや、円が今

の為替水準を維持し続けるか、もっと上昇するようなことになれば、米国西海岸の往復デスカウントの航空料金が6万円前後と沖縄への往復ノーマル料金と同じ程度であることを考えれば、何も大金持ちだけではなく、普通のサラリーマンが新幹線を使って通勤するような感覚で、米国から月に一度出社するような社員が出てきても不思議ではないのではないかとさえ思えるのである。現に、私の友人の米国人や日本人にもこのようなライフスタイルを送っている人も徐々にではあるが少しづつ増えてきている事実がある。3月にジェットロの仕事でカナダと米国の9都市を回った時に、住宅の価格を調べてみたが、ロサンゼルス郊外の日本人駐在員が好んで住むレゾンドビーチやオレンジカンティのアーバインやニューポートビーチ、サンフランシスコ郊外のシリコンバレー界限にも、40万ドル出せば購入できる物件は山ほどあった。

- ・ 子供は生まれてまだ9ヶ月と小さいので、教育面については何も考えていない。ただ、生まれて9ヶ月の子供に、日本と海外とを結ぶ懸け橋になると、常々言い聞かせている。
- ・ 家庭や親戚間でのコミュニケーションのための情報インフラについては、現状では手紙によるやり取りは年賀状のみでほとんどないが、電話は良く使っている。ファックスが普及してくれば、ファックスとパソコンを使った情報のやり取りを行っていきたいと考えている。
- ・ 私の父の兄弟は8名と多く、長男ではないが家督を相続しており、甥と姪の数、すなわち、私の従兄弟の数だけでも25名、その子供も14名に増えてきており、年1回の年賀状のやり取りだけで、状況を正確に報告することが困難となってきた。そのため、冠婚葬祭の時のみならず、各種の連絡やコミュニケーションをスムーズに行うためにも、できれば、ファックスやその他のニューメディアを用いた新しいコミュニケーション・システムの構築には関心がある。また、父方以外の親戚も大変多いことから、親戚に配るマルチメディア対応のデジタル新聞を、マッキントッシュを使って作ってみた

いと考えている。

③社会生活面での現状と将来ビジョン

- ・現在の仕事は、SASやその他の異業種の交流会や勉強会と（財）データベース振興センターでの仕事を通して知り合った国内外の人との交友関係が基盤となっている。このような、今日まで公私に渡ってお世話になった方々とのご縁や、今までに培った人脈の広がりや深さの程度に応じて、仕事をさせていただいていると言っても過言ではない。このような認識に基づき、時間の許す限り、仕事に関連する分野の専門家が集まる国内外の会議、交流会や勉強会には積極的に参加するようにしている。また、一度築いた縁を、より深くするための努力を惜しまぬよう心掛けている。
- ・サラリーマンではなく、独立して生活していくためには、時間を有効活用し、お金を稼がなくてはならず、なかなか、無報酬のボランティア活動にまで、手が届かないのが現状である。
- ・その他、全寮制で同じ釜の飯を食い、屋根の下で苦楽の生活を共にした高校や大学時代の友人、さらには、恩師の先生やOBや後輩との交流は楽しくもあり、大切にしていきたいと考えている。
- ・人とのつながりと言った点では、なるべく頻繁に電話やファックスを利用して連絡を取るようにしている。また、海外出張した際には、時間のある限り絵葉書を出すようにしている。海外から出す絵葉書やファックスは、年賀状による年一回の近況報告を補う効果があると思われる。
- ・今後は、パソコンに接続したファックス・モデムを効果的に活用したコミュニケーション・システムを構築し、活用していきたいと考えている。また、将来的には、テレビ電話や公衆電話回線を使ったパソコ

ンとビデオカメラを組み合わせた簡易型のデジタル・ビジュアル・コミュニケーション・システムを使って、米国にいるパートナーとコミュニケーションを実験的に行ってみたいと思っている。

④健康面での現状と将来ビジョン

- ・健康面については、現在何も問題がないため、改めてスポーツクラブに通うというようなことは考えていない。しかしながら、独立して仕事を行っているため、健康が財産であるという認識から、ガン検診や定期検診を受けるよう妻から勧められている。
- ・小学校時代から大学まで剣道をしていたことがあるため、時間に余裕が出てきたら、また再スタートしたいという気持ちはある。しかしながら、時間が取れないという事に加えて、適当な道場も近くにないため、現状では困難な状況である。
- ・スポーツに関しては、妻とテニス、スキーやゴルフを子供が生まれる前まで行っていたので、育児が一段落したらまたスタートさせたいと考えている。

⑤精神面、生活信条面での現状と将来ビジョン

- ・亡くなった祖父が身延山を本山とする日蓮宗の熱心な信者で本願人でもあり、神社本庁の崇敬会員にもなっていたため、幼い頃から仏壇や神棚の前で手を合わせるという習慣が身に付いた。現在では、両親と数年に一度、身延山に登ったり、お彼岸やお盆の時に地元の菩提時にお墓参りに行く程度となっており、自分では日蓮宗の信者であるとは思っていない。また、妻の母親は熱心なプロテスタントで、毎週日曜日に教会に行くことを欠かさない人である。そのため、子供が生まれる前は、月に何回か教会に行っていたこともあった。

- ・生活信条としては、「慈悲寛大自己反省」、「感謝報恩」、「一期一会」
- ・高校、大学と学んだ学校を創立した広池千九郎が、創建したモラロジー（道德科学）の影響を受けている。この、モラロジーを一言でまとめるならば、普通道德（一般に道德と考えられているもの）と最高道德（孔子、釈迦、キリスト、ソクラテス、日本の皇室に一貫する最高道德）の実質・内容・実行の効果を比較研究し、我々人類の生存・発達・安心・平和・幸福の実現のために、最高道德の実行が不可欠であることを実証した学問である。祖父がモラロジーの熱心な研究者であったため、父の兄弟や親類縁者も何十人とこの麗沢高校、麗沢大学を卒業しているので、自然に私も進学した。
- ・現在の宗教活動や社会教育活動学校、及び学校での道德や教育の現状は、従来の紙を媒体としたテキストを使い、僧侶、牧師、講師、教師が自己の体験をベースとして話をするため、話の内容、レベルに大幅な格差が見受けられる。そのため、だれから話を聞くかということが、学ぶ者にとって、その話をどれだけ真剣に聞くかという判断する上で、重要なポイントとなる。しかしながら、人格も優れ、話も上手な人物の数は十分ではないというのが、どの団体も抱えている大きな問題点となっている。この問題を解消するためには、だれが教えても、十分に分かりやすく、また、学び手側の学習レベルに対応しうるインタラクティブに教えを学ぶことができるような教育システムの確立とマルチメディア・ソフトウェアの作成が不可欠であると思われる。

⑥娯楽教養面での現状と将来ビジョン

- ・仕事柄、コンピュータ・グラフィックスやバーチャル・リアリティーの技術を応用したドライビング、フライト、ゴルフ・シミュレーター

やモーション・システムを使った大画面映像シアターについては関心があるので、市場調査を兼ねて時々見学に行くことがある。最近では、英国や米国から新しいシステムが続々と日本に上陸し、日本全国に設置されてきているため、時間と費用がかかることから、全てを見る事ができないのが残念である。

- ・自己啓発については、冒頭でも述べたとおり仕事と直結するため、大変関心を持っている。特に、効率良く、短期間のうちにあるテーマを学習するためのインタラクティブなパソコンを使ったシステムとマルチメディア・ソフトウェアの開発をビジネスの一つの柱と考えているので、自分自身で開発したシステムを使って、あらゆる学問分野にチャレンジしていきたいと考えている。

第3章 “ハイパーネットワーク キング社会” へ至る ための問題点の整理

1. サラリーマン達の仕事観

情報機器の普及は著しい。オフィスは言うに及ばず、今や各家庭にも幾種もの情報機器が入りこみ、あるいは仕事のための交信の手段として、あるいは友人など広範囲のコミュニケーションの道具として、根を下ろしつつある。携帯電話やポケットベルの普及もあり、今や移動のための道路や街までがオフィスとなりうる状況にある。そのような中で、オフィスの概念そのものが少しずつ変化しているのではあるまいか。サラリーマン達が仕事とオフィスとの関係をどの様に捉えているかを、SAS東京の会員を対象としたアンケート調査の結果からみてみたい。

(1) 自宅やサテライトオフィスでも勤務が可能か

「電話、FAX、パソコン通信、テレビ会議等の情報機器やネットワーキングの活用で、現在の仕事が自宅や自宅近くのサテライトオフィスでも可能になると思うか?」という設問に対する回答をみってみる。

充分、あるいは相当程度可能 (うちすでに実行している)	14 (9)
部分的には可能	15
不可能	11

充分、あるいは相当程度可能であるという記述が有効回答者数40人のうち14人(35%)に見られ、また全ての仕事をホームオフィスやサテライトオフィスで行うことはできないが、出勤などにより職場の人と交流することと組み合わせることで部分的には可能であるという趣旨の回答が15人(38%)から得られた。実に73%のサラリーマンにとって、ホームオフィスやサテライトオフィスでの仕事は身近なものとなっているのである。

しかもそのうち既に実行している人、試しているという人は9人いる。『現在も残業をせずに自宅に帰ってからパソコンで仕事の続きをしてい

ます』『すでに独立してからは、FAX、パソコン通信、データベースを自宅で活用してビジネスをしている』『四国の自宅と東京のオフィスとをFAXでつないで、自宅での業務処理を試行的に実施中』など。回答を寄せた人それぞれにより、ホーム・オフィスの捉え方や働き方に違いはあるようだが、大多数の回答者が関心を持っていることが分かる。

①在宅勤務が可能とされた主な職種

研究活動、通訳、シンクタンク業務、著述業など、クリエイティビティの高い仕事での在宅勤務は、多くの人が可能としている。もちろん必要に応じて出社したり、他の人との交流を持ちながら、孤立した空間での時間の使い方が仕事効率を高めることにもなる。

その他、設計・計画、情報処理、ソフトウェアの開発、などの仕事もやり方によっては可能な仕事としてあげられている。

また『営業』を挙げた回答もあった。自宅を中心として仕事をし、定期的に会社と連絡をとるという営業の形態は、ホームオフィスでの働き方としては異質なものであるが、自宅を基地としての仕事という意味ではやはり在宅勤務と言えよう。ただし、(3)でとり上げる自宅やサテライトオフィスでの勤務が不可能な仕事の筆頭に挙げられたのも『営業』である。仕事の基地を会社と捉えるか、あるいは自宅と捉えるかで、回答者の意識の差が、回答の相違となったものと言えよう。

②部分的には自宅やサテライトオフィス勤務も可能という場合

仕事の全てを自宅やサテライトオフィスで行うことはできないが、出勤や同僚との交流と平行させることで、可能であるという意見についてみる。

『週一回位は在宅勤務の日をつくっても良いのではないか』という回答が多い。仕事の大部分は会社で、週一回位は周りの雑音に煩わされずに自分のペースで仕事をするために自宅やサテライトオフィスで、というところであろう。反対に『週一回の出社で、その他は在宅勤務を』と

いうケースもある。こちらはじっくり仕事に取り組むには自宅の方が良い環境というわけか。

(2) 機器類の使い方

実際にホーム・オフィスで仕事をしている場合、設備している機器、あるいは必要と思われる機器についての記入もあった。

①利用されている機器

有用な情報通信機器として挙げられているものは次の通りである。重複であげられたものも数に入れて機器名すべてを拾い出した。

FAX: 5

パソコン: 5 (うちパソコン通信と特記したもの1)

コピー機: 3

電話: 2

電話器は『言わずもがな』の存在で、特に記入しなかった人が殆どであろう。一番手軽でしかも通信したい相手も必ず設備している機器なので、当然利用頻度はもっとも高いと推測できる。

アンケートの回答に表れた利用度の高い機器の代表格はFAXとパソコンである。電気通信サービスとして電話に次ぐ普及を遂げたFAXは、最近では家庭にもだいぶ入りこんでいる。市中でもFAXサービスを店頭でしているコンビニエンス・ストアが眼につくほど。自宅に設備していなくとも送信のみは可能で、ごく身近な機器となった感がある。

もう一方のパソコンの使われ方は、回答に見るかぎりはっきりしない。『パソコン通信やデータベースを活用している』『長野の別宅からパソコンでやりとり』と明記された回答もあるが、他の利用は会社のコンピューターの端末機としてなのか、あるいは単にスタンド・アロンのパソコンとしてなのか、分らない。

今回のアンケートの回答に見るかぎり、テレビ会議を活用している

人はいない。『テレビ会議は必要ない』という記述も1件あった。

②スタンド・アロンで

自宅勤務といった場合、かならずしもオフィスとオンライン上でつながっているとは限らない。『コピー機とパソコンさえあれば』『休日や帰宅後、自宅で仕事を』というように、OA機器といってもスタンド・アロンの機器、あるいは使用法を挙げている人もある。つまり、自宅を孤立化したオフィスとみなし、必ずしも情報通信の必要でない部分の仕事をしているわけで、このような仕事の形態はアンケートに記入せずとも多くのサラリーマンが既に実行していると思われる。

(3) 自宅勤務が不可能な仕事と理由

いかに情報のネットワークがあっても自分の仕事はホームオフィスやサテライトオフィスではできない、という人の理由は大きく分けて二つある。一つは仕事内容があくまでも対人関係を重視するタイプの場合、もう一つは会社組織に起因する場合である。

①「実際に人と接するところから仕事がスタートする」というケース

『フェース トゥ フェースの情報が主なので』『セールスエンジニアにとってはマンツーマンのやり方しかない』『情報機器は役立つアシスタントにしかなり得ない』『眼のみから得る情報よりも、耳や鼻や第六感まで心身の全てを使って総合的に得る情報の方が、情報入手後の判断を正確に行いやすい』『営業畑なので、直接会ったり会議したりする必要がある』『マーケティングの仕事は、人と人との関係の中から新しいことが生まれ、一人ではできない』—いかに情報化が進んでも、人と人との触れ合いは機械には任せられない。人間の情感や感性を大切にし、相手にも伝えていくことはたしかに機械から機械の情報では十分にできないかもしれない。相手の顔を見て、肉声を交わしての話し合いは、さらに情報通信が高度化されても、軽視されることはないだろう。

『ソフトウェアの開発ならできるが、システムを統括していく立場としては、打ち合わせ、レビュー、客先との交渉などを行うために難しい。全ての企業・機関間でネットワークが結べるようになれば可能だろうが。』という意見にあるように、人と人との交流が充分できるほどネットワークがきめこまかなものになれば、もっと可能性は広がるだろうが。

②会社の組織上の問題

『社員が相手だから社内での管理事務は会社でやらないとうまいかない』『会社の方針で管理職はできるかぎり出社が義務付けられている』『在宅勤務したいが、上司の理解が得られない』—労働力は会社集中させるものともいうような、旧来の会社の考え方、また社員側の受け止め方からの理由であろう。

③その他の問題

次項にのべるようないくつかの問題から、在宅勤務は困難と判断している人もいる。これらは今後、改善されていかなければならない問題である。

(4) 問題点と今後への展望

①メンバーの質

『的確な用語・叙述ができないメンバーにやらせても上手くいかない』『連絡をとるべき相手が情報オンチだと、だれかに仲介をしてもらわなければならないので、よけい効率が悪くなる』などの意見もあった。情報通信の盲点とでも言おうか。OA機器の使いこなしがビジネス上の必要条件となる時代の到来を思う。

②環境がまだまだ未整備

『セキュリティ上、会社のネットは外からつながらない』『図面／

製品の状況／製造現場の状況／写真を含む報告書／ビデオテープ情報に基づく判断・評価業務を在宅で可能にするコストパフォーマンスの良いメディアと会社の環境が整っていない』『各種情報が機械登録されていればかなりの仕事が自宅などでできるのだが、現状ではまだそこまで機械化がすすんでいないので、原稿書き程度の作業しかできない』また『日本の住宅事情では自宅をオフィスにすることは無理。サテライトオフィスの整備があれば……』という声もある。これらはすべて自宅やサテライトオフィスで仕事することを積極的に考えながら、環境が整っていないため果たせないでいるという意見である。

また、『全ての企業・機関間でネットワークが結べるようになれば可能だろうが、現時点では、客先との交渉などまではできない』という声に代表されるように、情報インフラの整備を待望する声もある。

③個人の意識の問題

ホーム・オフィスという言葉聞いた時、どんなものを思い浮かべるだろうか？

「広々とした専用の部屋と、事務用家具や調度の整ったコーナー、必要なOA機器はすべて設備されていて……」、多くの人はこのように受け止めているようだ。しかし、現在の日本の住宅事情では、そんなスペースを確保できる人は滅多にいない。自分専用の机さえ持たず、ダイニングルームの隅でワープロを打ちながら会社から持ちかえった仕事を続けている場合さえあるだろう。そんなスペースでも、その人が自分のホーム・オフィスと思えば、それはそれで良いわけだ。もちろんきちんと仕事をするための条件は整えなければならないが、まず制約の中で可能な形で自分のホーム・オフィスを設計し、次第に仕事しやすいスペースに変えていくことはできるだろう。

このようなホーム・オフィスの捉え方、考え方の差異が、将来のホーム・オフィスでの仕事の可能性を左右するのではあるまいか。新しい形の勤務形態を試行するのは勇気がいることではあろうが、今までも仕事

の持ちかえりの経験が有る人は多いはずで、そう考えるともっと気軽になれるだろう。

④理想のオフィス像

『休日に出勤すると仕事の能率が上がるので、（自宅やサテライトオフィス勤務を）部分的に採用してみたい』という声もあった。電話や人々のざわめきといった職場環境の中で週の大半を過ごすサラリーマンにとり、人気のない休日こそ、集中して仕事に打ち込める日というわけか。そしてそれと同じ環境を得るには、身近な自宅やサテライトオフィスを仕事場とすればよい。

しかし日本の住宅事情から言えば、自宅をオフィスとして活用できると言い切れる人は少ない。特に首都圏の会社に通勤することを原則としているサラリーマンには至難のことである。アンケートの回答でも四国の高松や長野といった遠隔地と東京とを、FAXやパソコンで結んでのオフィスの試みの例が報告されている。今後このような形でオフィ스가全国に散らばり、ネットワークで繋がっていくことが予測される。

また、『毎日サテライトオフィスではなく、最適な場所で、どこでも同じ環境で仕事ができれば余裕が生まれる』という声もあった。自宅とかサテライトオフィスという固定された場所ではなく、自分の仕事しやすい場所、生活にも仕事にも快適な場所で仕事ができ、それが根幹では会社と繋がっているようなシステムができることが理想的なオフィス像と言えるのかもしれない。

2. 地域や家庭での人間関係に関する意識

(1) 地域や家庭での人間関係に関する意識の現状

—アンケート調査結果のまとめ—

質問3「『ホームオフィス（在宅勤務）やサテライトオフィス勤務が定着し、また通信ネットワークが盛んになると、地域や家庭で過ごす時間が増え、地域・家庭での人間関係が変わる』といわれます。それはあなたにとって好ましいことでしょうか。」については40名の方々から回答があり、それらの意見を整理してみると、以下のようになる（図表を参照のこと）。

①調査結果の定量的なまとめ

問3に対し、回答があった意見について全体的に見てみると、肯定的な意見が27名で全体の約7割、否定的な意見（7名）や中立的な意見（6名）がそれぞれ2割近くあった。

イ. 肯定的な意見

まず、肯定的な意見であるが、これも「全面的に好ましい」（全面的に好ましい方向に変わる）とする意見（19名、48%）と「部分的に好ましい」や「場合、条件によっては好ましい」（部分的に好ましい方向に変わる）（8名、20%）とする意見に分かれた。全面的に肯定する意見と部分的に肯定する意見を合わせれば、7割近くの回答者が肯定的な意見をもっていることになる。

肯定的な意見の内容は「好ましい（の一言）」という意見が8件（20%）で最も多く、次いで「自宅にいる時間が長くなり、ゆとりが持てる」（4件、10%）という意見が多かった。

ロ. 中立的な意見

次に、「よい面もあるが、悪い面もある」、「どちらとも言えない」、「仕事の内容による」、「やってみなければ、わからない」といった中立的な意見は、回答者自身の無経験から「わからない」とする意見や、回答者自身が自分の仕事の内容やおかれている立場を考慮して回答したと思われる意見が比較的多かった。これらの意見についても全面的なも

のや部分的なものに一応分けてみたが、挙げられている意見を見れば、どちらかといえば、否定的な意見に属するものと思われる。

ハ. 否定的な意見

否定的な意見についても、全面的に否定する意見や部分的に否定する意見に分けてみた。全面的に否定した意見は「（現状では）なかなか難しい」とする意見が割合多く、暗に「今後、諸条件が満たされれば、好ましい状況は期待できる」ことを示唆する意見は少なくなかった。全面的に否定する意見の「全然好ましくない」や「悪である」とする意見は2件程度であった。

部分的に否定する意見は、上述の「部分的に好ましい」や「場合、条件によっては好ましい」を裏返せば同様の意見とも考えられるが、回答意見のニュアンスの違いを集計分析者（筆者）なりに解釈して区分した。

②調査結果の定性的なまとめ

次に、人間関係が変わるとか、変わらないとかとする、その内容や理由についてみてみたい。回答者があげた意見をいくつかのグループに分類してみると、多い順に、地域との交流に関するもの、家庭や家族関係に関するもの、回答者本人の意識改革に関するもの、の3つに分けられる。

イ. 地域との交流に関する意見

肯定的なものであれ、否定的なものであれ、意見として挙げられたものは、地域社会についての言及（指摘）が最も多かった（16人、40%、但し複数回答）。

回答者自身の住む地域社会との関わりのなかで述べた意見には、まず、肯定的にとらえたものとして「在来の地域社会と交流する機会が増えるとする」意見や、「同じ住宅地や付近に住む同業種や異業種の

サラリーマンとの交流の機会が増えて視野が広まる」とする意見が多かった。このように、回答者の大半を占めるとされる会社員は、地域社会との交流を通じて自己変革や意識改革、視野の拡大を試みていこうとする意向が伺える。

このように好ましい方向に向かうとする意見の一方で、交流の機会や時間が増えるだけで、地域社会や家庭での人間関係が改善する、あるいは好ましい方向に向かうとは限らないとする意見もある。その理由として、地域社会や家庭での人間関係やコミュニケーションも職場社会とは異質で多様な要素が絡みあっていることを挙げる回答者もいる。

また、「地域の人々が在宅勤務者にある種の偏見をもたないこと」も必要だと指摘する意見もあった。さらにまた、在宅勤務でも、地域社会と全く交流せず、閉鎖的になっている限りは、一般の会社勤めとなら変わりなく、地域や家庭での人間関係の改善の余地すらないとする意見もある。

ロ. 回答者本人の意識改革に関する意見

次に多かった理由は回答者自身の意識改革である（14人、35%）。在宅勤務やサテライトオフィス勤務が定着し、また通信ネットワーキングが盛んになると、「地域や家庭で過ごす時間が増える」以前に、まず回答者自身が職場生活面でゆとりが増え、これまでに見えなかったもの、見えにくかったものが、視点が変わる、視点を变えることで見えてくる、といった意見が多く見受けられた。ただし、そのためには、いくつかの条件が必要で、その条件の筆頭として「自分で自分の時間を管理できること」を挙げている。

ハ. 家庭や家族関係に関する意見

家庭での人間関係や家族との関係については、地域社会の中で包括的に述べられている場合もあるにせよ、予想されたよりも指摘や言及は少なく、挙げられた意見の中では、最も少なかった（11人、28%）。しか

し、回答者が在宅勤務、サテライトオフィス勤務のいずれを前提としているかは不明であるが、そういった柔軟な勤務形態で家庭や家族関係にゆとりができる可能性については認めている。

ただし、「仕事場としての家庭」については比較的否定的な意見が多かった。例えば、「在宅勤務では、仕事とプライベートのけじめがつけにくいし、緊張感もなくなり、仕事の効率が悪くなる」という意見が聞かれた。こうした意見のように、現在の日本の住宅事情を反映したものもあり、このほか「在宅勤務の成否は仕事場のスペースが確保できるか否かでまゐる」とする意見も見られた。

(2) 現状把握から得られた知見と今後に残された課題

①現状把握から得られた知見

今回の意識調査は、会員の大半がビジネスマンであるSASの会員を対象にしたものであり、その調査の結果、在宅勤務とか、サテライトオフィス勤務については、それなりに、それらの勤務形態について認識されている方々が少なくなかった。そしてハイパーネットワーキング社会の到来を好意的にとらえている回答者が少なくとも全体の7割近くいることがわかった。また分散オフィスの導入を日本の従来の大部屋型の職場、仕事場からの脱出の好機にしたいとする意向がうかがえた。

内容的には、地域社会との交流を通じて意識改革や視野の拡大を試みていこうとする意見が最も多かった。とくにサテライトオフィスについては、「こちこちの会社人間」が、都市社会のなかにある企業拠点から住宅地を中心とした地域社会に回帰する手がかり、糸口、さまざまな人々との交流・ネットワークの拠点、手段として考えていることがわかった。

しかし、他方では、交流の機会や時間が増えるだけで、地域社会や家庭での人間関係が改善する、あるいは好ましい方向に向かうとは限

らないとする厳しい指摘もあった。

次に多かった意見として、「地域や家庭で過ごす時間が増える」以前に、まず回答者自身が職場生活面でゆとりが増え、これまでに見えなかったもの、見えにくかったものが、視点が変わる、視点を変えることで見えてくる、といった意見が多く見受けられた。

家庭や家族との関係についての意見は、地域社会の中で包括的に述べられている場合もあるにせよ、予想されたよりも少なく、挙げられた意見の中では最も少なかった。もちろん、柔軟な勤務形態により家庭や家族関係にゆとりができる可能性については認めているが、「仕事場としての家庭」については比較的否定的な意見が多かった。

前者については、回答者の経験の少なさからくるものもあろうし、後者については、日本の住宅事情からくるものもあると思われる。しかし、全体的に見れば、回答者の多くが、柔軟な勤務形態の一つとしての在宅勤務を、現実の問題として家庭や家族との関係でとらえていく段階には至っていないようにも思われた。

なぜなら、在宅勤務を中心とする米国型のテレコミュケーティングの日本への導入において、日本の企業の労働慣行や住宅事情によりテレコミュケーティングのバリエーションとしてサテライトオフィスが考えられたように、今回の調査結果からも、同様の事情を読み取ることができるからである。即ち、大半の回答者の意識には、「一般のサラリーマンにとって、サテライトオフィス勤務がせいぜいで、在宅勤務は主婦、女子や自営業者の勤務形態である」という認識がその背景にはあるように思えるからである。

②今後に残された課題

さて、以上の調査結果やいくつかの知見から、残された課題と言うか、四つの問題提起をしてこの節を終えることにする。

イ. 一つ目は、個人の自管理については、言うまでもないことだが、

長い間、職場で上司や時間に管理されてきた人間が自分で自分の時間を、生活を、仕事を管理することになる。言うほど簡単ではなく、よほどの訓練と能力を必要としよう。これに関して日本の従来の労働慣行の功罪は大きい。これらの労働慣行の見直し、改善を含むこの種の調査研究が望まれる。

ロ. 二つ目は、個人の意識改革、視野の拡大の問題である。見えなかったものが見えてくる。と言うことは、アイデア出し、研究開発の面ではよいが、地域や家庭に入れば、相手にも同様の効果が期待される。長所、欠点両面が見えてくるということである。三つ目の家庭の問題とも関わるが、特に、在宅勤務でのストレスの問題は、勤務者には知的生産性を低下させるばかりではなく、本人や周囲の家族に精神衛生上のなんらかのダメージを与えることが予想される。この種の問題は職場のそれとは違った意味で複雑な人間関係上の要因が絡み、その解決には困難が予想されるので、この種の調査研究も望まれる。

ハ. 三つ目は、家族との関係である。「亭主、元気で留守がいい」というコマーシャルに象徴されるように、父親抜きの疑似「母子家庭」に、いきなり、父親が帰ってきたら、家庭・家族内にどのようなインパクトを及ぼすだろうか。ましてや、1日中家のなかで仕事する。こうなると、本人、家族ともに近所に気を使うようになる。こうして地域社会がかかわり出す。これは、会社勤めをやめたOLや主婦が家庭に戻り、自宅で仕事をする場合、また、定年退職の場合も同様のことが言えるのではないか。中年離婚、高齢離婚といった問題とも無関係でないような気がする。この種の調査研究も望まれる。

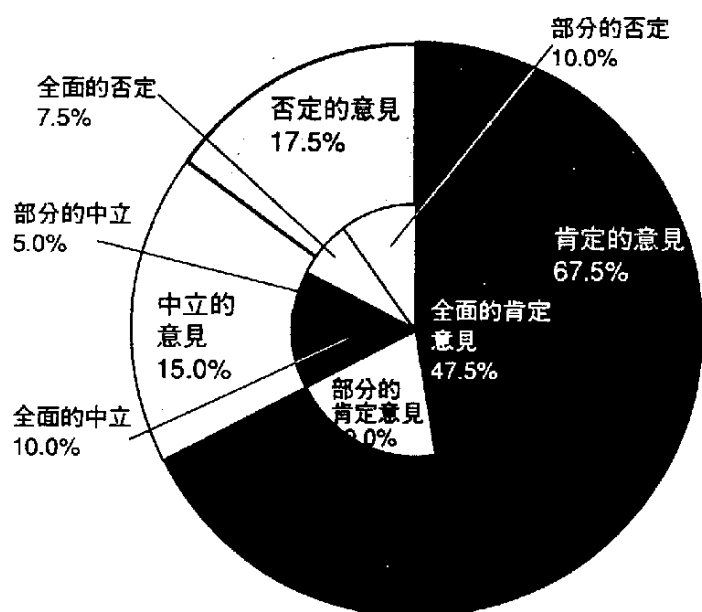
ニ. 四つ目は、地域社会の人間関係である。地域社会といっても新興の住宅地と在来在市町村とでは多少様相が異なるであろう。しかし、基本的には、地域社会には「村社会」—地域なりの論理とか掟、支配

関係がある。血縁、地縁支配の強い社会である。企業社会以上に年功序列社会で隣組社会でもある。

3 区分意見の分布図

肯定的意見		中立的意见		否定的意見	
27人 (67.5%)		6人 (15.0%)		7人 (17.5%)	
全面的 肯定	部分的 肯定	全面的 中立	部分的 中立	全面的 否定	部分的 否定
19人 47.5%	8人 20.0%	4人 10.0%	2人 5.0%	3人 7.5%	4人 10.0%

図



このような地域社会のなかで、町内の、向こう三軒両隣の干渉と共存して、仕事をしていくのは、言うほど簡単ではない。回答者の幾人かが指摘しているように、「地域のひとも在宅勤務者に偏見をもたぬことが必要だ」し、「地域のほうもいま一つなじみが薄い」ので、「地域や家庭との交流の機会・時間が増えたからいったそう簡単に、人間関係が改善するとは限らない」というものである。例えば、「週休2日制で平日に休んだら、近所で、首になったという噂がでた」という笑えない話さえあるくらいである。

いずれにしても、地域社会と共存した在宅勤務、ホームオフィス、サテライトオフィスのあり方に関する調査研究が今後より一層望まれるところである。

3. 新しいネットワークについての意識

「情報機器やネットワーキングによって、会社とは違った“縁”ができ、能力発揮の場が増えたり、また独立も可能になる」との考え方について30～40代のサラリーマン40名に聞いた。

①会社での職縁とは少し違った「縁」ができる。

そういう可能性がある、あるいは否定しないを含めて86%の人が肯定している。

一方で、情報化、情報技術の活用と縁は別物だとする考え方が14%ある。情報技術は手段であるというのが主たる理由である。もっとも、YESとした人も多くは情報技術の側面はやはり手段と考えているのではないか。

血縁、地縁、学縁といった従来からの縁に加えて、職縁からも個人的人脈（ネットワーク）は形成されるが、情報機器、特に端末の高機能化、小型化、軽量化、携帯性向上等から個人の情報環境武装が容易になること、それらによる相互コミュニケーションが図られることに

より、いわば「電縁」とでも呼ぶべき縁ができ、新たな個人的人脈（ネットワーク）が形成される可能性が高い。

その可能性実現のための要件として多くの人が指摘しているのは、「オフラインでの信頼関係の構築の必要性」、「アフター5等の個人の時間が確保できる社会の実現（真の時短）」、「生活中心の考え方への移行」等である。

②新たな能力発揮の場が増える。

情報機器やネットワーキングによって、新たな能力発揮の場が増えると考える人は全体の78%、新たな「縁」ができるとした人の90%にのぼる。

ただ、そのためには個人が情報環境武装し、ライフスタイル、ワークスタイルを変革していくことが必要であると多くの人が指摘している。その要件としては、「主体的な行動ができること」「自ら求めるタイプの人であること」、「会社での仕事以外での能力の発揮（政治、宗教、趣味等）」、「会社での仕事に還元、寄与される能力の発揮（必ずしもプライベートライフのみでの能力発揮に限定することはない）」などが挙げられている。

一方で、縁ができるのと能力発揮は別問題とする人が10%いた。それは、即ちこれらの要件にあるように、所詮は個人自身を変革しないかぎり能力発揮につながらないことを言っているのであって本質的には同じ見方と言えよう。

個人が情報環境武装して、どう変革するべきか。企業の内外でも専門分野の役割分担を変えていこうとするトレンドがあり、経営面からも従業員個人の価値、能力を最大化する価値観に変わっていくことが要請されていると思われる。そういう中で我々は、企業内外での、地域での、国際社会でのさまざまな変化に対する感受性を高めること、自分が主体的に行動するための仕掛けを持つこと、そして情報の活用（受信）能力を向上させることが必要だと考える。ネットワーキングによる縁の支援

のもとで、自分の能力、ライフスタイルに応じた生活行動を展開することこそ新たな能力発揮の場と機会を増やすことにつながるのではないだろうか。

③独立の可能性は否定しない。

以上の結果、仕事面でも独立する人が増える可能性があるとしたのは全体の64%、能力発揮の場が増えるとした人の80%いた。ただ、可能性があるとした人のほとんどは「一部の人に限られる」としている。一方、独立して仕事をするのは別次元のこと、あるいは独立にはもっと別要素が卓越するとする人が20%いた。

結局、情報化、情報技術、ネットワーキングにより新たな「縁」ができ、能力発揮の場が増え、独立も可能になるだろうとする人は64%、全体の三分の二になる。

現にネットワーキングによって独立して活躍していると答えた人が3名いた。支持意見としては、そういう傾向は社会の多様化、ストックの増大の面で好ましいとするものがある。

ただ、独立には経済性の裏付けが必要であり、そのためには知恵がお金で評価される社会になること、それを支える制度の整備が必要であると指摘している。

独立は一部の人に限られるというのは、独立の対象となるのは創造的ワークに限定される、高度な専門技術、特種技術の保有が必須条件、スモールビジネスが中心になると多くの人が指摘しているからである。

企業の側から見ると、従業員個人が情報環境武装することによって自己変革し、新たな能力発揮の場を求めているのに、そういう人達のヨコのつながりによる自然発生的、自己増殖的アクションを経営に取り込めない場合、企業と個人の間に価値観のミスマッチが発生し、結果として会社へのロイヤリティが低下し、独立の可能性を生ずることになると考えられる。

④ 2つのモデル

さほど多くない人達のアンケート結果からかなり強引に考察すれば、新しい情報技術やネットワーキングがもたらす変化は次の2つのモデル（またはスタイル）を生むと考えられる。

<モデル1>

第一のモデルは、情報機器、ネットワーキングにより従来の縁とは異なる新たな「縁」を作り、会社でのパワー発揮とは別次元での能力発揮をすることにより自己実現に寄与し、自己の能力を開花するパターンである。既存の企業がそういう人達をうまく取り込めるように変っていけば企業の内外においても情報環境に対して変革した個人の活躍の場は増える。

このモデルは、仕事の性格上独立は困難な人達において、「仕事中心」の生き方から「生活中心」と並立した二元的共生型の生き方をとることを可能にするモデルである。仕事の上での刺激だけではなく、仕事外での外部からの刺激、仕事を離れた人間ネットワーキングを求める人達のモデルである。やはり、実質的な労働時間の長さが課題であり、毎日のアフター5が本当に個人の時間になっていかないと、このモデルの実現は困難であると思われる。

<モデル2>

一方第二のモデルは、企業や大学、研究機関等で専門技術、専門分野に卓越した知識と経験を持ち活動している人達において、自ら主体的に求めて行動する人が、企業の内外での役割分担の変化の中で、スモールビジネスの芽を見つけ、事業として独立し成功していくパターンである。

このモデルは、小さな会社、集団でした方が効率的な仕事、創造的、分散型の仕事をしている人達が率先して情報武装し、企業内外でのネットワーキングを積極的に遂行し、自己の主体性を高めることにより実現可能なものである。

4. サラリーマン達の描く退職後のイメージ

サラリーマンの描く退職後のイメージについて「あなた自身、退職後の事なども考慮したうえで、これからのワーキングスタイルやライフスタイルに関して、どのようにお考えになっておりますか？」という質問を行なった。

自由回答形式のためか色々な考えが記されている。回答を退職後にやりたいことという観点から分析したところ、やはり仕事に関する答が最も多く、これに続いてボランティア、地域活動、趣味、スポーツの順であった。そしてネットワークに関する回答も40人中13人とかなり多かった。アンケートの対象が主として30代及び40代のS A S会員であったためと思われる。以下退職後やりたいこと、退職後のための準備、ネットワークのイメージ及び考察に項を分けてより詳細に説明する。

(1) 退職後やりたいこと

①仕事

何らかの形で仕事を続けたいと考えている者が大部分である。例えば、「現在の職場に依存しないでも、ある程度経済的に支えうる仕事の間を確保したい」、「生涯現役で活動したい」、「仕事が遠隔地になっても、ネットワーキングで大部分解決つけたい」、「できれば退職前に田舎に戻り、自分の地盤を作ってそのままその地域で老後の生活（仕事を含めて）を過ごしたい」、「退職しても、恐らく今の仕事を続けていると思う」、「現在は企業のオーナーのため、退職という概念はなく、生涯現役のつもり」などの意見や希望である。

仕事を続けたい	(11人)
スキルを磨く	(6人)
生涯現役	(1人)
仕事の効率化	(1人)

②ボランティア

上述のように、退職後も仕事を続けたいと思っている反面、現在が仕事中心で地域に対する貢献がおろそかになっているためであろうか、かなりの者がボランティア活動をしようと考えている。例えば、「退職後は、環境問題、技術開発、教育問題などを多面的に協力できるだろうし、またボランティア活動もやっていきたい」、「地域のボランティア（港区は外国人が多いので国際交流で）をしている」、「ボランティアとしての参加時間を退職後はふやす」などである。

ボランティア活動に関わりたい（6人）

③地域活動

地域活動に関してもボランティアと同様に意識が高い。

「退職後は、郷土史の読みなおし、音楽鑑賞、スポーツ、散歩、地域活動への参加などフリーに生きたい」、「約10年ちょっと、このまま突っ走るつもりだが、その後はもう少し地域の為に何かやってみたい」、「趣味や地域活動、学校関係など、幅広く縁を広げていきたい」、「港区は外国人が多いので国際交流で地域のボランティアをしている」などである。しかしながら、「地域密着型の発想は、とても東京的だと思う」とあるように地域のことを考えるのは、地方または地域という概念を持つことの少ない東京人特有なことではないかという指摘もある。

地域活動への参加（10人）

田舎で暮らしたい（3人）

地方で仕事をしたい（2人）

④趣味

現在が仕事中心で他のことになかなか時間を割けないためか、退職後はなにか趣味をやってみたいと思う人が多い。今まで仕事中心できて突然に趣味を中心または生きがいとした生活に変えることができるかどうか

かは疑問ではある。今回のアンケートは主として働き盛りの者を対象としたためであろう。退職後再度仕事についての方の意見に「準備したものは何にもならない。無駄。退職後社会にしがみつくと心は一寸考えもの。今迄会社にしがみついて来た延長線上に良いことは生まれない。春に準備したものは冬には役に立たない」とあった。退職後の生きがいなどというのは大上段に構えた質問ではあるので、他の機会に焦点を絞ったアンケート調査を行なうのも一法であろう。

趣味に関する意見としては；

「必ずしも地域に密着する必要はないが、気の合った仲間を見つけ、老後まで長く興味のもてるテーマを共に勉強したり、楽しんだりしたい」、「65才まではオフィス中心の生活だが、以降は郷土史の読みなおし、音楽鑑賞、スポーツ、散歩、地域活動への参加などフリーに生きたい」、「山が好きなので山の中で仕事できれば幸福である」、「オペレッタを楽しみにしている」、「会社人間ではなく、会社も、家庭も、友人関係も、趣味もトータルにバランスのとれたライフスタイルを作って行きたい」、「仕事縁だけでなく趣味や地域活動、学校関係など、幅広く縁を広げていきたい」などである。

趣味に関心がある（7人）

⑤スポーツ

趣味のひとつであろうが、健康の問題も絡んでいると思われるスポーツに関心を持つひともある。

⑥勉学

いろんな勉強をしておき退職後の準備をしておこうという意見が多い。また退職後も勉学をしたいという意識を持っている。

例えば、「退職後も自宅でできる専門的な作業をこなせるスキルを身に付けておきたい」、「来世紀は、これまでの常識が通用しなくなる。何事においても可能性を追求できるような準備をしておくことが

ポイントである」、「自分の技術ポテンシャルを高め、次のステップではそれを欲してくれる人／集団と共存繁栄できればと考えている」

⑦その他

アンケートが自由記入方式であったためバラエティに富んだ回答が得られている。

「情報通信機器を十分に活用し、国際的なビジネスの展開を必要最低限の費用、人数で行なっていきたいを考えている」、

「健康と他人から存在価値を認められること。これが基本だと考える。忙しくすることが大切。」

「それまでの蓄積情報を活用するライフスタイルとしたい」、

「一刻も早く仕事に振り回される人生から抜け出したい」、

「仕事は一つの自己実現の手段にすぎない」、

「仕事以外にやりたい事があつたらいつでもそれができるように仕事を通 じて資金、情報、人脈などの準備をしていくつもり」、

「自分達で働く道が開かれることは自分にとっても楽しい」、

「残り10年間に、退職後のことを考えて、勉強と、実績作りと売り込みをやりたいと思う」、

「仕事の中身と役割はどんどん変化する」、

「仕事の対象となる空間とは連続するが一体にさせるつもりはない」、

「今から準備しておきたい。やりたいことはたくさんある」、

「出来る限り働く時間を減らしたい」、

「10年単位で目標とするライフスタイルを描いている」、

(2) ネットワーキングのイメージについて

全体的にみてネットワーキングに対する関心が大きい。既にパソコン通信などを利用あるいは体験しているひとが多いためであろう。

ホームオフィス（在宅勤務）、サテライトオフィス、リゾートオフィ

スに言及している人もあった。

「気の合った仲間を見つけ、周囲に発信したりする生き方を早く定着させたい」、

「情報通信機器を十分に活用し、国際的なビジネスの展開を必要最低限の費用、人数で行なっていきたいを考えている」、

「退職後、田舎で生活するとすれば、都市との情報交換ネットワークを介してできればありがたい」、

「若い時代は仕事を選ばずネットワークと信頼を広げる」、

「より各種メディアを有効活用して仕事の効率化や情報の収集、活用的高度化を図りたい」、

「仕事が遠隔地になっても、ネットワーキングで大部分解決つけないと思っている」、

「世界的な問題、環境、人口、飢餓等具体的プロジェクトをすすめる上でコミュニケーションは必要である。通信コストの低減を求む。」、

「自立するためのハード、ソフト面での準備は、自分だけでやっても駄目で、本来のネットワークが必要」、

「仕事以外にやりたい事があつたらいつでもそれができるように仕事を通じて資金、情報、人脈などの準備をしていくつもりである」、

「自分の技術を欲してくれる人／集団と共存繁栄できればと考えている」、

「仕事縁だけでなく趣味や地域活動、学校関係など、幅広く縁を広げていきたい」、

①メディアについて

退職後とは言っても60才と80才では使えるメディアも異なるであろう。また同年代ではあっても情報リテラシーには個人差があるので、全体的にみてメディアはなにが好適か考慮する必要がある。更には健康状態によっても、使えるメディアは違ってくるであろう。

退職後に有効なメディアと考えられるのは、紙、郵便、電話などの

コンベンショナルなものが主で、FAXやパソコン通信、マルチメディア、ISDNがなじむには情報リテラシーの点で大きな障壁があるようだ。

情報リテラシーには個人差が若い人々より大きいので、ネットワーキングは限られた範囲になるであろう。

②情報について

ネットワークに乗せる情報もかなりバラエティに富むものと予想される。退職後とは言っても、その人が有する情報や経験あるいは価値観、人生観が個人によって極めて異なるので、必要なまたは関心のある情報分野は色とりどりであろう。

③地域的要因

退職後は田舎・地方に住みたいという意見が多いが、これもまだ若くて健康だからそう考えるのであらうとも思われる。年齢を重ねるほど誰にも健康問題が出てくる。従って医療機関やサービスシステムが整った場所の方が住むには良いであらうから、田舎よりも都市の方が好適であらう。

逆に言えば物理的な移動が制限されてくるから、ネットワーキングが重要となるかも知れない。

④経歴的要因

それまでにどういう縁を築いてきたかにもネットワーキングのあり方は依存するであらう。会社人間、仕事人間としての引きずりにも影響を受ける。例えば元校長先生であるなら、その地方では名士として知られており、ある団体やネットワークに参加しようとしても、経歴に合わない、ふさわしくない等と本人が思ったり周囲からそのように見られたりするるので、障壁ができてしまう。そのような経歴的要因を取り除くためには、フェース・ツー・フェースではないパソコン通信やマルチメディ

アなどが可能性を秘めている。

⑤コスト・経済的要因

退職後には収入も限られるであろうから、どんな形態のネットワーキングであれ、これに回せる費用にも制限がある。

(3) 考察

退職後については全体的に言ってまだほとんどの人が漠然としてしかとらえていない。回答者のほとんどが30才代40才代であるから約20年以上も先のことまで考えておれないのかも知れない。またこの年代の人は企業などでは働き盛りであるから、退職後までも考える余裕がないのかも知れない。ある意味では考えても無駄と思うのかも知れない。回答の1つに「春に準備したものは冬には役に立たない」とあった。

なるほど働き盛りの人は身体的に悪いところもそうはないであろうし、仕事にも恵まれているだろう。家庭にも恵まれているが、核家族で年寄りと同居している人は少ないであろう。このような状況では、退職後のことを具体的に、現実的に考えることは無理であろう。退職後について議論をするのであれば、先ず現状把握即ち現在の退職者達がどのように生活しているのかをとらえることが必要であろう。

退職後は所得が減るばかりでなく健康なときには予想していなかった、あるいは頭のなかで考えることはできても、実感として理解できない体の不調からくる精神的な落ち込みもあるかも知れない。今回はその点に的を絞ってはいないので具体的なことは不明である

今回のアンケートでは、人生観・価値観・生きがいについての議論は全く除外してある。退職後のイメージであれば、この点を考慮する必要があると思われる。

例えばそのキーワードとして；

仕事？ 物？ 環境？ 金？ 富？

健康？ 正義？ 宗教？

家族？ 子供？ 配偶者？ 友人？ 異性？

趣味？ 勉強？ 旅行？ グルメ？ スポーツ？

社会への貢献？ ボランティア？...

など色々なことが予想される。

これらの価値観に基づく老後の過ごし方（即ちライフスタイル）及びそのためのネットワーキングはどのようなものが考えられるかをより詳細に検討すべきであろう。

第4章 “ハイパーネットワーク ング社会” への展望

まとめ: 情報社会に日本は生き延びていけるか

個人の創造性（クリエイティビティ）をサポートする“ハイパーネットワーキング社会”は、今や自宅を拠点にしたVAN（付加価値通信網）やノート型パソコン、マルチメディア利用による営業マン支援システムとか、LANやワークステーションベースのCAD利用による研究者支援システム、さらにはCDROMを使ったマルチメディアやVR（バーチャルリアリティ）利用による教育・創造支援システムなどの出現により身近のものとなりつつある。

このハイパーネットワーキング社会では、1985年の通信自由化以来の新しい情報通信メディアの実用化、ISDN（総合デジタル通信網）、移動体通信の発展と普及がますます進み、豊かな仕事と生活の場が実現していく。各家庭においても双方向性の情報の検索と加工ができ、文字・音声・映像を統合化して自由に操作できるオブジェクト指向のマルチメディアがますます発展・普及し、ゆとりと夢のある生活が容易に楽しめるようになるであろう。ホログラフィーの3次元映像でリアルな場面を思い出すこともできるし、また実物と同じような立体感や遠近感を実現する仮想現実（バーチャルリアリティ）の中で空想の世界を味わったり、異質の人とのコラボレーションを通じ、お互いの知恵を結集した情報創造を行ったりする。また、自宅のマルチメディア端末で世界の旅行情報を見ながら、海外旅行のプランニングと手続をしたり、新刊情報を見ながら画面を通じて読んだり、図書購入の手配などをしたりする。

しかし、現実にはアンケート調査の結果でもわかるように、スケジュール管理をするための電子手帳を使いこなしている割合も少なく、名刺管理についてもデータ入力と更新の手間がかかる点で、情報機器を使う人は一部しか見受けられない。このように、ハイパーネットワーク社会の未来と現実との間にまだまだギャップが存在することは事実である。

現実の日本の情報社会について客観的に見てみると、つぎの7項目の問題点が考えられる。すなわち

1. 心社会と情報社会交流の必要性
2. シーズとニーズのギャップの問題
3. 情報システムデザインにおけるブレークスルー思考の必要性
4. 環境破壊型無価値情報氾濫の問題
5. 情報創造経営の必要性
6. 文化的距離と言語の壁克服の必要性
7. 情報流の物理的距離克服の必要性

以上の7項目以外にも問題点はまだあると思われるが、本稿ではこの7項目につき提案も含め論を進めていく。

1. 心社会と情報社会の交流の必要性

現在、地球環境悪化問題が人類のみならず地球上の全生態の存続の点でクローズアップされている。このような状態に至った背景には、自我意識に基づく人類の身勝手な情況認識が挙げられる。情報社会と言われる今日、情報発信基地からの一方向の広告情報などは洪水状態であり、情報伝達の原点とも言える言葉によるコミュニケーションも口害に等しいケースが非常に多い。これらもまた自我意識に基づく身勝手な情況認識により生じたものである。情況認識は外的情況認識と内的情況認識とに区分され、前者に基づく人間の知識としてのフローが行われる形態から構成される社会が情報社会であり、後者に基づく人間の感情としてのフローが行われる形態から構成される社会が心社会である。外的情況とは各個人・人間組織を取り巻く外的情況であり、国内外の政治、経済、社会環境情況、企業との相互関連性のある株主、証券会社、取引先、地域住民及び従業員の情況、個人と相互関連性のある銀行、学校、病院、知人等の私的関係者などの情況を言い、内的情況とは各個人の心理的情況であり、仕事、生活、人間関係、健康及び年齢、住宅等に関し心理的に生起する精神的ストレス、生きがい、満足または不満の感情などに関する情況を言う。

マサチューセッツ工科大学人工知能研究所の創設者でありこの分野における著名なマーヴィン・ミンスキーは、“The Society of Mind”の書の中で、心がたくさんの小さなプロセスができていて社会を“心の社会”と定義し、心を構成する小さなプロセス一つ一つを“エージェント”と名づけている。このエージェントは階層構造となっており、下位の“エージェント”には“作り屋”の“エージェント”と“壊し屋”の“エージェント”が存在して、この下位の“エージェント”同士が争いを起こして全体のエージェントの競争力が弱まる場合もあるとしているが、外部状況に対応する心の内部状況もまた前向きな潜在意識と後ろ向きの潜在意識同士の争いを起こし、全体としてチャレンジマインドが弱まってしまう。

従って、情報社会においては心社会ということも考え、両者を交流させるような考え方が必要である。すなわち情報社会で行われるコミュニケーションは人間の心の奥底を揺るがすような感動を与えるものであり、この感動の広がりが大きくなることを願いたい。

2. シーズとニーズのギャップの問題

情報処理の新しい流れとして、オープンシステムの時代に入ってきた。オープンシステムの採用により、LANなどのネットワークもフレキシビリティに構築することができる。エンドユーザーの手元にはハードウェアメーカーやソフトウェアベンダーの各種各様の仕様に基づくパソコンやワークステーションなどの端末機が置かれており、パーソナルネットワークを構築してリアルタイムにマルチメディアにより情報を双方向でやりとりしようとしても処理できないことが多い。

本来ならば各ハードメーカーやソフトウェアベンダーが企業の壁を取り除き、ユーザーの立場に立って標準仕様を設定すべきである。しかし、実際には他社商品に比しユニーク差を追求するあまり、シーズ優先で商品開発が行われており、ユーザーニーズの真の把握が後ろ手に回ってし

まっている。オープンシステムの潮流はシーズ優先の反省を前提とすべきである。実際に売上増大のためのバージョンアップや仕様変更のために機能が増大したものの、ユーザーニーズに合致しないため商品在庫が発生したり、ユーザーの方でも新商品を買ったものの不具合点があるため、ほとんど未使用の状態になってしまうとか、すぐに処理能力の優れているスペックの新商品が発売されたため、まだ使える手持ちの商品が不要となってしまうなどの問題は頻繁に起きる問題である。また、ダウンサイジング、アウトソーシング、マルチメディア、LANなどの情報化が進み、新しい需要が開拓されたとしても、ユーザーニーズに適合したソフトウェアの開発が遅れるとか、情報サービス面での体制が不備の場合にもまた、高額の情報投資をしたわりには成果が期待できぬことにもなりかねない。

従って、今後はハードウェア、ソフトウェア、及び情報サービスなどの面につききめ細かいアンケート調査をした上で、ユーザーの使う立場での評価をリアルタイムで行って、各メーカーへフィードバックするような体制づくりも必要だと考える。このような評価システムが正しく機能することにより、業界の体質の強化にもつながり、無駄な開発競争にも歯止めがかかり、貴重な人的資源、物的資源の節約にもなる。このような観点から、情報社会におけるメーカーシーズとユーザーニーズの一致の努力を願いたい。

3. 情報システムデザインにおけるブレークスルー思考の必要性

よく企業で構築されている情報システムの機能と実際の仕事の流れを調査してみると、情報の流れが非常に複雑な乱流状態になっており、しかも物の流れと情報の流れが一致していないケースが多い。さらに、情報の実際の処理時間に比し情報の停滞時間が極めて長いことが往々である。分析の方式としては、実際の仕事の手順に従って使用されている伝票類とか帳票類のコピーとかを巻紙に貼りつけた上、どの担当者が何時どの

ような作業を行ったのかを書き込んでいく手法を用いる。最新のワークステーションなどの端末機を使用しているのにもかかわらず、いかに情報の流れに無駄があるかが一目瞭然にわかる。このような情報システムデザイン上の問題は企業だけに限らず、公共機関、医療・教育分野、旅客サービス業務、証券会社の手続業務等、あらゆるところに見られる現象である。

このような情報流の乱れを整流化するためには、情報システムデザインにおけるブレークスルー思考が不可欠である。すなわち、まず情報システム構築の本質目的を段階的に調査した上で、あるべき姿を明確に描いた上で情報システムデザインの企画をしなければならない。あるべき姿を描く過程では特にユーザーも含めた参画巻き込み方式の検討を行う。特に、企業戦略遂行上の柱でもあるSIS（戦略情報システム）については専門コンサルタントによるSIS監査を行い、本質的な問題点の明確化とブレークスルー思考による企業の経営戦略アイテムの抽出をする必要がある。SIS監査の視点とその内容を下記に示す。

(1) 企業の使命・目標の設定と認識

企業の使命や目標はブレークスルー思考により決められており、その使命や目標を達成するために情報システムデザインがされていなければならない。そして、全社員や企業の全関係部門がこの戦略情報システムの目指すところが企業の使命や目標及び自己の業務における使命や目標と合致していることを認識している必要がある。

(2) 戦略的企業風土

企業風土は他社に比しユニーク差のある戦略的なものでなければならない。この企業が戦略性を保有するために、全社的な立場のみならず顧客、取引先も含め、あらゆる関係者を参画させたトータル的な視野からの革新的アイデアの創出によるシステムづくりが必要である。

(3) SISの戦略性

情報システムそのものが他社の追随を許さぬ強力な手段となっており、自社の経営戦略を実現させているものでなければならない。競合他社のSISの戦略性との比較・検討を行うことはもちろんのこと、異質企業のSIS戦略性との比較・検討も行った上で優位な戦略システムを構築する必要がある。

(4) 戦略立案支援の情報システム環境

意思決定に必要な情報蓄積とコンピュータ支援による共感統合発想ツール、これを支えるシステムエンジニア及び数量化理論等を利用した高度な情報処理技術、データベースネットワークなどが完備されている必要がある。

(5) ユーザーニーズの把握

社外ユーザーのニーズを的確に把握し、統計的に解析するシステムが構築されていなければならない。ユーザーニーズについては定量的・定性的なニーズを調査項目ごとに把握した上でリアルタイムに解析するようにする。この場合、自社商品に関するユーザーニーズを把握するばかりでなく、他社商品に関するユーザーニーズも把握することが必要である。例えばPOS（販売時点情報管理）システムの場合には、売れ筋商品日次速報、地域別比較、新製品に関するユーザー評価情報、他社新製品情報と販売動向などのデータからユーザーニーズをリアルタイムに把握するようにしている。

(6) トップによる推進体制の確立と組織体制

情報戦略を策定しSIS構築を積極的に推進するトップマネジメントの存在が不可欠であり、経営に密接したCIOを含む情報戦略策定部門がジェネラルスタッフとして社長直轄になっていることが必要である。さらに、情報戦略策定部門とパートナーシップをとる情報システム部が他の部門

から独立し、社長直轄部門や情報企画本部などに位置づけられている。SISの企画・立案はスタッフ部門が行い、情報システム部門はその支援と開発・運用を統括する。このような組織体系が円滑に機能を果たすためには、異質企のSIS構築に関し指導経験のある外部コンサルタントの活用も必要である。

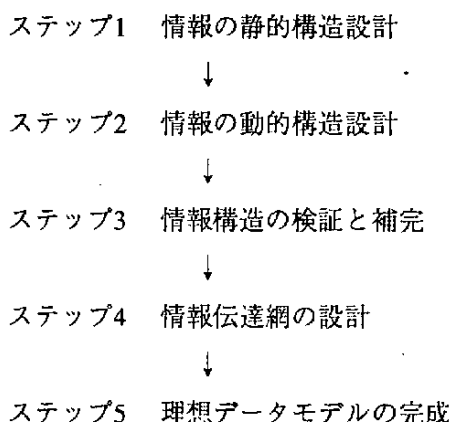
(7) 理想追究のSISの構築方法

SISの構築の手順が明確にマニュアル化されていることが必要である。例えば、構築手順の第1段階の計画段階についてはシステム開発の長期及び短期計画の策定と定期的かつ状況の変化に応じての見直しをするとともに、計画の規模・重要性を勘案した承認ルールの確立と実施、他業務との整合性を考慮した優先順位づけとセキュリティ対策が行われなければならない。第2段階の調査・分析の段階では、調査対象・範囲・方法を明確化した上でユーザー参画のもとで基礎資料の収集及び分析結果の評価を行うと同時に、内外の技術予測と障害要因に関する事前の調査・分析を行う必要がある。第3段階の開発検討の段階では、必要な資金・要員・設備の確保と業務分担並びに責任体制の明確化、システム全体としての信頼性・安全性・効率性の確保をしておく。その上で、複数案についての所要費用と効果についてブレイクスルー経営戦略公式による定量的な評価と定性的な評価もしておかなければならない。ブレイクスルー経営戦略公式とはあるべき理想段階での効果を算出する戦略公式であり、概要を示すと

$$\text{SIS効果} = \frac{\text{アウトプット}}{\text{インプット}} \times \text{定性的側面}$$

となる。ここでインプットは投資額を初め調査分析、研究開発コスト、設計・製造・サービスコストなどの所要費用総額であり、アウトプットは利益額である。定性的側面は戦略的価値を評価した結果を数値化したものである。インプットの費用に対するアウトプットの利益を理想値で算出しておき、戦略的価値は他社システムに対する優位性を指標化した

数値にして、この数値を乗ずる。この算出されSIS効果が最も大きい戦略案を最適案として選択する。最適案についてはステップ1～5の手順で理想最適案のモデル設計をする。



4. 環境破壊型無価値情報氾濫の問題

コミック週刊誌、広告類、新聞の芸能記事などの印刷情報の中には青少年の健全な育成に阻害要因となる環境破壊型無価値情報が多数存在しており、無駄な紙量印刷という貴重なエネルギー資源浪費にもつながっている。現在地球環境問題がクローズアップしているが、ハイパーネットワーキングの情報社会を目指す過程で地球環境問題を取り上げるのと同様に精神環境問題を取り上げる必要がある。むしろ逆に精神環境改善に役に立つ情報をデータベース化しておき、教育・経営などの組織活動の際に利用するとよい。無価値情報をどれだけ収集しても何ら創造的思考は行えぬが、価値情報を収集すればするほど情報同士を共感統合するステップを踏むことにより価値のある情報創造が行える。

野中郁次郎の著書“知識創造の経営”の中で“知の創造”について述べているが、価値ある情報創造とはこの“知の創造”にほかならない。すなわち“知の創造”の基本にある暗黙知と価値ある形式知を組み合わせ、さらに価値のある情報創造を行うようにする。情報創造とは、既存

の情報を組み合わせ、新しい意味・価値を生み出すことであり、このプロセスを通じて新しい商品、サービスのコンセプトや新しいやり方を創出できる。データベースから抽出されたキーセンテンスやキーワード同士の意味する内容を共感統合することにより発想の昇華が進み知恵が生まれる。この発想方式を「共感統合発想方式」と言うが、この方式は何か新たな価値を生み出したりという目的本質を追究するために、目的本質を保有すると思われる。必要データを分類・整理されてあるデータベースから抽出することから始めるので、現状の事実とか立場により発想が制限されることがない。

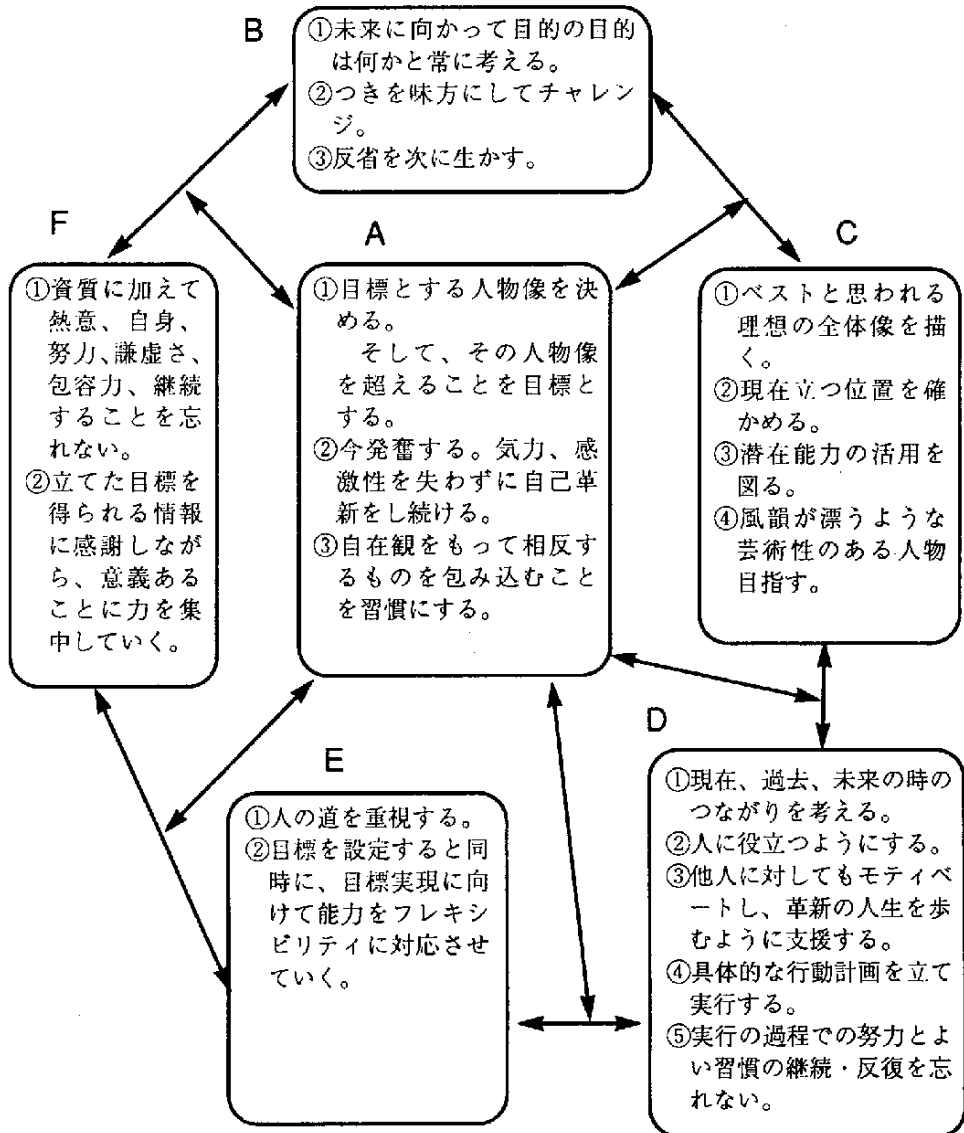
いずれにしろ、環境破壊型無価値情報の代わりに環境創造型価値情報のデータベースづくりを進めることをまず第一に考えねばならない。例えば人の生き方に関するデータベースならば「積極的行動の習慣化」という分類のキーワードとして次のようなセンテンスをデータベースにファイリングしておく。

- ①可能性も運命も自分で切り開く。
- ②決してあきらめぬ意思があれば夢は必ず実現する。
- ③人間はチャレンジ精神を失ったとき老人となる。
- ④心に描いた計画を強固な決意をもって成し遂げる。
- ⑤チャンスは座して待っていても訪れぬ。アタックして挑む人々だけが勝ち取れる。
- ⑥チャンスは自分の外に求めることはできぬ。ただ漠然と待っていたら一生チャンスをつかめぬ。
- ⑦チャンスは頭脳の中にあり、自身の中にある。自分しか掘り起こせぬ。
- ⑧有言実行。決断したら必ず実行。
- ⑨どんな小さいことでも今この瞬間から自分の意思で始める。
- ⑩悪い習慣の方が身につきやすい。ほとんどの場合、怠惰な習慣が身についている。

このようなデータを端末機の画面を見ながら共感したものをマーキングすれば、コンピュータプログラムにより自分自身の共感した全データが統合化されて、文字情報ならびにイメージ情報としてアウトプットされると同時に手引書が印刷されて手元に出てくる。このようにすることにより、真に価値ある環境情報創造情報がそれぞれのパーソナリティーに合った書物として手元に置かれ、役立つようになる。すなわち書物は与えられるのではなく自らつくるのである。また、データベースにより貴重なキーセンテンスを選びだすことにより思いがけないアイデアも生まれるため、発想支援のツールとしても使用できる。

なお、事例として「いかに成功するか」の理想イメージ図を下記に示す。データベースは花伝書、論語、“Dynamics of Motivation”、“企画・計画・実行の法則”である。

「いかに成功するか」
の理想イメージ図



Aを中心に、B→C→D→E→F→Bと循環した具体的行動をとること。

最後に企業組織活動における環境破壊型無価値情報を生み出している業務を示す。

(1) 企業組織活動における付加価値のない業務

付加価値のない業務とは、直接・間接作業のいずれにおいても行われる作業がマネジメントの目標とする課題に対し有意義な結果を生み出さないとか、組織を取り巻く外部環境に対し全地球理念から見て相反する結果を生み出す等の業務である。すなわち、

①定型的会議:

会議のための定型的会議、総論賛成で各論反対の会議、根回しのための会議、トラブル対応のための会議、一部の人しか発言しない会議

②定型的教育:

定型的教育スケジュールに従って行われる教育、教育を受ける人の立場に立たぬ押しつけ教育、地球的理念に反する教育

③定型的資料の作成:

資料探し、ファイリング、転記、計算、不必要な書類の作成

④地球理念に反する業務:

廃棄物につながる商品の販売・製造、資源の無駄な使用、スペースの無駄な使用であり、企業組織活動における業務分担別に記述すると下記の項目となる。

(2) 業務分担別革新阻害要因

No.	財務分担項目	阻 害 要 因
1	研究開発	デザインレビュー打合せ、開発会議、書類準備及び調査、資料作成、見積計算、品質トラブル対応
2	設備投資	回議書作成及び承認手続き、設備投資検討会議 設備投資計画の見直し、修正、投資計算
3	市場調査	市場調査資料作成、調査結果検討会議 他社及び市場環境に関する資料の調査
4	広告宣伝	広告宣伝資料作成、広告宣伝効果、企画検討会議 他社の広告宣伝戦略に関する資料の調査
5	製造	製造準備作業、製造トラブル対応（部品調達、 段取、教育、訓練、治具作成）、検査、記入、 梱包、運搬、リハンドリング
6	人事管理	人事管理打合せ、業績評価資料作成、定型教育、 人事管理トラブル対応
7	物流	物流管理打合せ、在庫資料作成、未稼働及び 死蔵品処理
8	財務・経理管理	財務・経理管理打合せ、財務・経理管理資料作成 不採算対応検討

5. 情報創造経営の必要性

今はまさに創造の時代であり、企業レベルとか個人レベルに関係なく創造力を働かせて進歩していかなければならない。そのためには情報機器支援による情報創造が好ましい。ここでは企業の生産活動における情報創造の進め方について記述する。

生産業務における情報創造の進め方を大別すると、現状把握をベースにした情報創造思考と生産業務のあるべき理想の姿をベースにした情報創造思考となる。前者が現実観とするならば、後者は理想観と言える。

現実観は常に現実を起点にするため、現実の悪さ加減の改良という対応に追われ発想の飛躍性が乏しいのに対し、発想されたアイテムは実現可能なものが多い。一方、理想観は常に理想のあるべき姿を起点に発想するため、他社に比し差別化されたユニークで飛躍性のある発想となるが、発想されたアイテムの中には実現困難なものもある。従って、理想観で理想のあるべき姿を描いた上で現実観で現在地点を明確にし、現実観を理想観に到達させるような革新行動計画を立てることが望ましいと言える。

ここで、現実観、理想観、現実観と理想観の組み合わせの3方式の情報創造プロセスを図式化して記述してみる。このプロセス図で示されたアプローチは企業経営に限らずあらゆる組織活動にも適用できる。

5-1 現実観に基づく情報創造プロセス

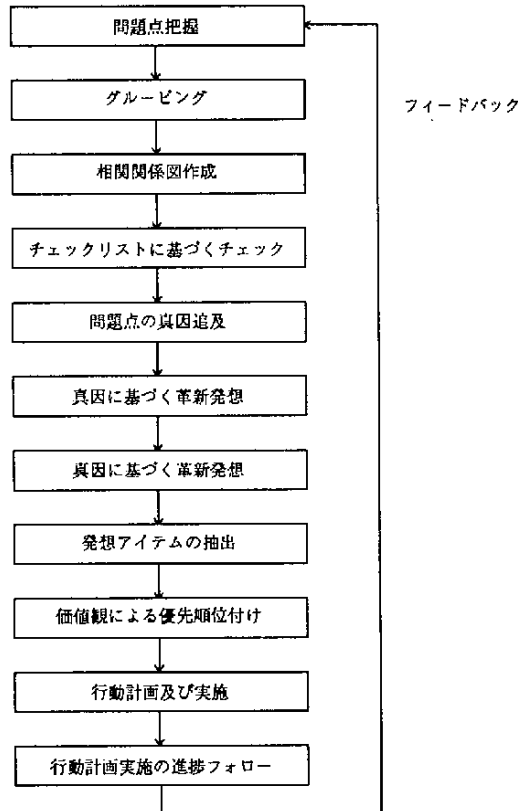


図 1

このプロセスは、問題の事実を把握してから問題の真因を解明することによって改善案を立案・実施するという現状を起点とするアプローチである。

- (1) 問題点の把握
- 問題の事実をありのままに再現できるようにして把握する。
- 把握データは数値に基づく定量データと言語による定性データがある。
- (2) グループینگ
- ①定量データを言語で表現し直す。
- 例えば経営分析指標同業他社指標から算出した基準値、標準偏差をもとに偏差値に換算した後、その点数を不良、普通以下、普通、良、優の言語に置き換える。
- ②言語データをカテゴリー分類により、関係するものを1、無関係のを0として分類する。カテゴリー項目は経営特性を示す項目である。
- (例ー整流化、フォーキャスト精度、リードタイムの把握、トップポリシーの明確、現状把握、多種少ロットへの対応、能力、成果への直結)
- ③各項目のカテゴリーの出現頻度を数量化Ⅲ類で分析する
- ④分析結果を用いて関連項目のグループینگを行う。
- (3) 相関関係図作成
- 変数の固有値をもとにグループینگ結果の相関関係を検討し、相関関係図を作成する。共感と結合（止揚を含む）により相関関係部分の言
-

語化をする。

- (4) 問題点のキーワード化 相関関係図に示される言語をもとにキーワード（主語＋動詞）をつくる。
- (5) キーワードのチェック 目標のレベルアップ及び全体最適化と活性化の2 因子について、キーワードが現状管理レベル、改良レベル、創造レベルのいずれかにあるかを見る。
- (6) 問題点の真因追究 相関関係図全体及びキーワードチェック結果で浮かび上がってくる問題点の真因を洞察する。例えば「経営の人間力が創造レベルになるような努力が行われていない」というように、すべてのキーワードの背後にある根本要因を明確にする。
- (7) に基づく革新発想 生産業務に関する問題点の根本をなす真因を創造レベルにするための発想を行う。
- (8) 発想アイテムの抽出 革新発想を通じ具体的な発想アイテムを抽出する。
- (9) 価値観による優先順位づけ 自社、経営者の価値観に基づき発想アイテムの順位づけを行う。
- (10) 行動計画及び実施 抽出されたアイテムの優先順位づけを行った後、行動計画表を作成する。（考えられる障害と対策、達成段階と期限を記述する）
-

- (11) 行動計画の進捗フォロー 行動計画表コンピュータ管理することにより進捗フォローをタイムリーに行うことができる。

5-2 理想観に基づく情報創造プロセス

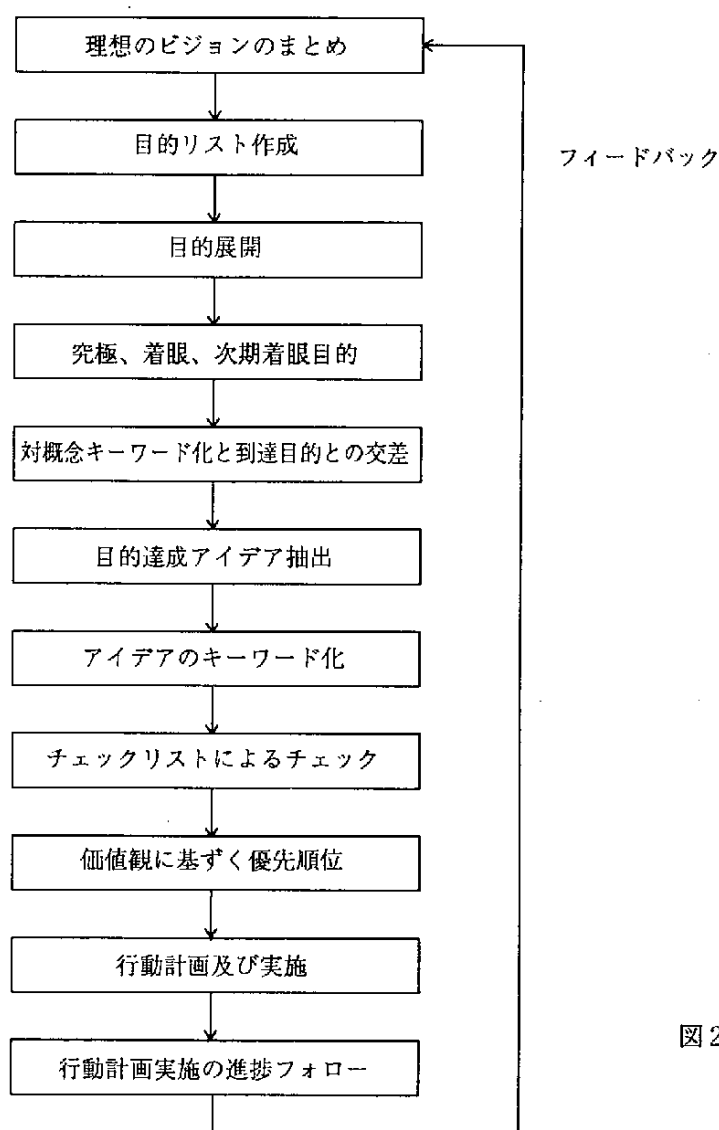


図 2

このプロセスは、あるべき理想の姿（ビジョン）をありありと描いてから問題の目的をブレークスルーで理想レベルまで展開した後に実行対象の到達目的を決め、行動計画を企てるというアプローチである。

- | | |
|-----------------|---|
| (1) 理想のビジョンのまとめ | 5年先、10年先等の生産業務に関する理想像を描く。 |
| (2) 目的リストの作成 | 問題の目的を思いつくままに書き出す。
在庫削減の目的→未稼働品処理、顧客ニーズを満足する製品供給、リードタイム短縮、新製品見直し、情報システム構築（需給システム）、金利減少、利益向上、スペース削減、人員削減、物流リストラクチャリング、整理整頓、工程見直し等 |
| (3) 目的展開 | 問題の目的を目的的思考により目的展開する。
在庫削減の目的
他社に比しユニーク性のある社会貢献
↑
顧客ニーズを満足する製品供給、利益向上
↑
新製品見直し、情報システム構築（需給システム）
↑
工程見直し、物流トラクチャリング
↑ |
-

リードタイム短縮



未稼働品処理、人員削減、金利減少



整理整頓

(4) 究極、着眼、次期着眼目的の決定

究極目的:他社に比しユニーク性のある
社会貢献

着眼:新製品見直し

次期着眼:情報システム構築（需給シス
テム）

(5) 対概念キーワード化と到達目的の交差

対概念キーワードを選択し、その対概念
キーワードの目的展開をする。

例として、在庫削減の場合献立の見直し
というキーワードを選択し、目的展開し
た後、到着目的と交差させる。

生涯現役－新製品見直し



長生きをする



健康を維持する



栄養バランスをよくする



体重を減らす、食費削減



献立の見直し

この場合、新製品がすべて陳腐化しないようなものとなる。すなわち永続性のあるものを開発するという目的が浮かび上がる。

(6) 目的達成アイデア抽出

対概念キーワード化と到達目的を交差させて、浮かび上がってきた目的を達成させるためのアイデアをBS方式で抽出する。

例) 永続性のある新製品の開発
照明器具、住宅用素材、教育用プログラム、健康器具……

(7) アイデアのキーワード化

定性的、定量的な面から抽出アイデアを絞り込み、取り組むべきアイデアのキーワード化をする。

例) 21世紀に通用する工事用照明器具を開発する

(8) チェック～行動計画の進捗フォロー

現実観に基づくタイプと同じである。例では、21世紀に通用する工事用照明器具を開発する体制を人間的側面まで絞り込んで検討し、行動計画を決め実施する。

5-3 現実観と理想観の組み合わせプロセス

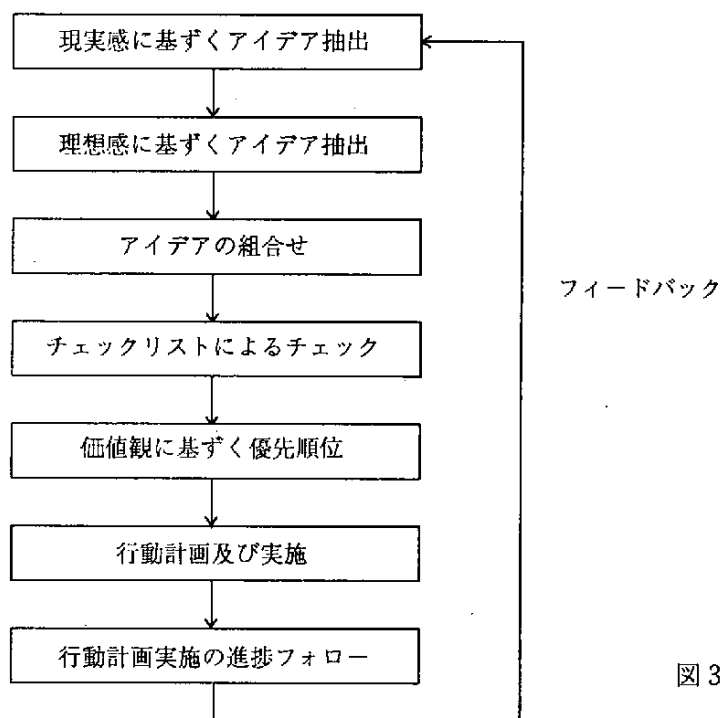


図3

この方式は現実観と理想観念に基づいて抽出されたアイデアを組み合わせるもので、プロセスとしては（図1）、（図2）で説明した各プロセス内容と重複する。

6. 文化的距離と言語の壁克服の必要性

西洋の文化及び言語と東洋の文化及び言語との間には確かに根本的な違いがあるし、東洋の地域の中でも国によりそれぞれの違いがある。

ハイパーネットワーキング情報社会は日本だけのものでなく、それぞれの国が情報の発信並びに受信基地となってコミュニケーションする全体最適型の情報社会にならなければならない。逆に、情報ネットワークこそが国という文化的距離、言語の壁を超えられるものであると言える。その意味で、フォトCD等を使用したイメージ処理や自動翻訳機等は有力な情報ツールとなり得る。

人間にとって最終的な万国共通語は数字とシンボライズされた図形である。日常会話であるとか物質の呼称、形容詞などを数字と図形の組み合わせにより標準化すれば、文化的距離とか言語の壁も克服できる。日本語の片仮名を図形として数字と組み合わせ情報伝達をする試みをしたことがあるが、一歩進めて万国共通の図形記号を決めれば翻訳不要のコミュニケーションになり得る。

片仮名と数字の組み合わせた48種類の記号を次のように意味づけ、人間の生き方のチェックができるようにした。

①ア: “天” の意=天地・自然の理に合致しているか。

②イ-1: “亥” の意=時間価値を重視しているか。

イ-2: “意” の意= “意い”、 “想い”、 “希い”、 “思い” は前向きか。

③ウ: “有” の意=目標に合致した実行計画になっているか。

④オ: “居” の意=有価値・無価値の基準は明確にし、有価値を追究しているか。

・
・
・

④⑧ ン: “∞” の意 = 「正」、「反」 = 「合」 の止揚をしているか。 (⑤

～④⑦: 省略)

この48通りの記号の組み合わせにより、人生の生き方に対するチェックができる。パソコン通信を通じての国際的な教育実践の場などに利用可能である。このような図形を決めた上、数字の組み合わせた記号を標準化することにより、身体障害者のためのコミュニケーションツールとしても使えるようになる。

前例の場合

ア→011

イ-1→021

イ-2→022

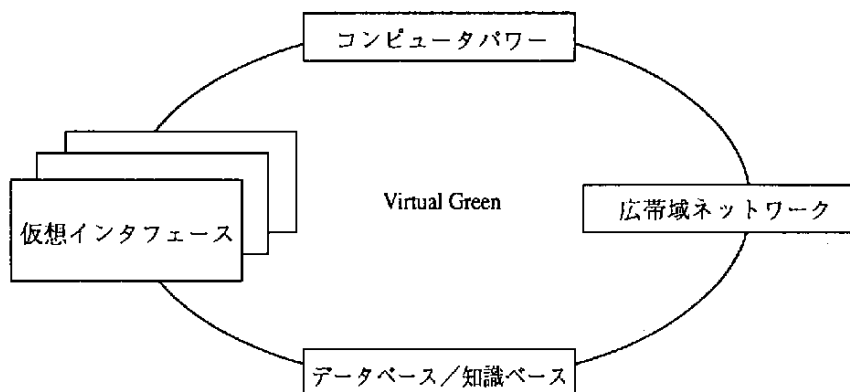
と、すべてを数字に置き換えることにより、手のひらに指で数字を描くことによるだけで言葉を伝えることもできる。

7. 情報流の物理的距離克服の必要性

人間は、いくら情報社会になっても顔と顔を突き合わせないと本音でのコミュニケーションができない。しかし現実には、情報流の物理的距離が海外までに及ぶとなると簡単には出かけていけない。すなわち人を物理的に移動することは費用もかかり、時間も消費し、利用する交通機関のエネルギーも使用することになり、いろいろと制約条件が発生する。この情報を伝達するために、人を動かす考え方を逆にして情報を動かして人に情報を伝達する考えが“物流”に対する“情報流”となる思考である。

このような思考に従った概念が“Virtual Green”の考え方である。ワシントン大学川畑正大教授の定義によれば、「Virtual Greenとは、人々が広地帯域ネットワークでリンクされた仮想インターフェース (Virtual Interface) を媒介として電子的に創造された感覚的メディアに浸り、その中で相互のコミュニケーションが可能となる情報環境である。」として

いる。図示すると次のようになる。



Green Spaceでは、複数の人が同時に3次元のモデルを見ながら、場合によっては同時に仮想空間の中でモデルの中に入りこみながら3次元の音を聞き、対象モデルに手を触れることができることにより、あたかも同一の場所に存在する感じで相互に情報交換ができる。また、複数の人がVirtualGreenで名画をCGを通して鑑賞する際に、名画に描写されている絵を迫力のある動画として映し出し効果音を聞くことによって、想像に絶するような共感が得られる。すなわち、文字を超えた次元の絵画情報による共感統合発想ができるようになるであろう。現実にもこのようなシステムの開発は実用化に向けていま一歩のところまできている。

以上、現実の日本の情報社会について7つの問題点を取り上げ、その対策方法を記述してきた。これらの具体化ができてこそ、世界の情報社会において日本は真のリーダーシップをとれるものになることを確信する。

－以上－

参考文献：

- 1)日本GUIDE/SHARE論「SIS監査の実務」(日本経済新聞社)
- 2)斉藤環著「戦略情報システム入門」(東洋書店)
- 3)木嶋恭一監訳「ソフト戦略思考」(日刊工業)
- 4)西田正吾、佐伯胖著「ヒューマン・コンピュータ交流技術」(オーム社)
- 5)和多田作一郎著「創造的経営情報システム論」(白桃書房)
- 6)G.ナドラー、日比野省三著「ブレイクスルー思考」(ダイヤモンド社)
- 7)寺本義也他著「学習する組織」(同文館)
- 8)万代恒雄著「スーパーサクセス」(グッドライフ・ブックス)
- 9)小川弘志著「謡曲・狂言・花伝書」(角書書店)
- 10)遠藤武司著「CIMバーコードシステムとネットワーク」(中央経済社)
- 11)野中郁次郎著「知識創造の経営」(日本経済新聞社)
- 12)マーヴィン・ミンスキー著「心の社会」(産業図書)
- 13)安岡正篤著「論語の活学」(プレジデント社)
- 14)日比野省三著「企画・計画・実行の法則」(こう書房)
- 15)マイケル・シュレーグ著「マインド・ネットワーク」(プレジデント社)
- 16)内野明著「情報創造のフレームワークへ向けて」(JAMIN研究会ー1992.5月号)
- 17)PAUL.J.MIEYER著「Dynamics of Motivation」(PJM JAPAN)

—— 禁無断転載 ——

平成5年3月発行

発 行	財団法人 日本情報処理開発協会 東京都港区芝公園3-5-8 機械振興会館内 TEL 03 (3434) 8211 (代表)
調査委託先	システムズ・アナリスト・ソサエティ 埼玉県志木市館2-5-2 鹿島ビル4階 志木サテライトオフィス内
編 集	株式会社 志木サテライトオフィス・ ビジネスセンター 埼玉県志木市館2-5-2 鹿島ビル4階 TEL 048 (476) 4600 (代表)
印 刷 所	株式会社 三州社 東京都港区芝大門1-1-21 TEL 03 (3433) 1481 (代表)

